

# 石川県埋蔵文化財情報

## 第 34 号

巻頭図版（一針C遺跡、北吉田ノシロタ遺跡、矢田新遺跡）

平成26年度下半期の発掘調査から ..... 所長 福島正実… (1)

### 発掘調査略報

中カワナミマエダ遺跡（輪島市） ..... (4)

古府・国分遺跡（七尾市） ..... (6)

北吉田ノシロタ遺跡（志賀町） ..... (8)

二所宮サンマイダ遺跡（志賀町） ..... (10)

細滝神社遺跡（かほく市） ..... (11)

福久遺跡（金沢市） ..... (12)

戸水ホコダ遺跡（金沢市） ..... (13)

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）（金沢市） ..... (14)

金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市） ..... (15)

二日市イシバチ遺跡（野々市市・白山市） ..... (17)

一針C遺跡（小松市） ..... (20)

漆町遺跡（小松市） ..... (24)

矢田新遺跡（小松市） ..... (26)

加茂ボケ生水ウラ遺跡（加賀市） ..... (28)

平成26年度下半期の出土品整理作業 ..... (30)

### 調査研究

方形横板組隅柱留め井戸の構造について ..... 久田正弘… (33)

素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について ..... 川畑 誠… (43)

2015年10月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

## 写真解説

### 一針C遺跡

#### 遺跡遠景（南東から日本海方面を望む）

遺跡は、小松市北部を流れる梯川中流域右岸の沖積平野に位置する。平成10年に県営ほ場整備事業に伴う試掘調査で新たに発見された、弥生時代から中世にかけての遺跡である。現在とは違い、蛇行して流れていたと考えられる梯川の旧流路やその支流に沿った自然堤防とみられる微高地上に立地していたと考えられ、今回の梯川改修築堤工事事業に伴い南北700m、東西350mの範囲に南北方向に長く分布する遺跡であることが判明した。後世の耕地整理により現況は平坦な水田となっており、遺跡は水田下の標高約2m前後の面で検出できる。

#### 平成26年度調査区出土の弥生土器

遺跡からは、弥生時代中期後半頃に掘削された環濠とみられる区画溝や弥生時代中期～古墳時代前期の平地式建物・掘立柱建物が複数発見されたことに加え、方形周溝墓や土坑墓などの墓域が集落域と混在して存在するなど、弥生時代集落の様相を具体的に把握することができた。遺構からは、弥生時代中期後半を中心とする多量の弥生土器や勾玉、管玉などの玉作り関連遺物、石鏃、砥石や石斧などの石器をはじめとする多様な遺物が出土している。



遺跡遠景（南東から日本海方面を望む）



平成26年度調査区出土の弥生土器

## 写真解説

### 北吉田ノシロタ遺跡 根がらみ材

羽咋郡志賀町北吉田地内に位置する遺跡である。根がらみ材は弥生時代終末期から古墳時代前期と考えられる径1 m前後の複数の柱穴から出土した。柱材は遺存しなかったが、柱の沈下を防ぐため、横木を井桁に組んでいた。当時の低地の建物で用いられていた建築技術を知り得る例として注目される。

### 矢田新遺跡 調査区東半遠景（北から）

矢田新遺跡は柴山潟を望む矢田野台地の西部、標高8～9 mの台地上に立地する。飛鳥時代（7世紀代）、奈良・平安時代（8～9世紀代）、室町・戦国時代（15～16世紀代）の集落跡を確認した。特に室町・戦国時代では、柵列を併設する大型の掘立柱建物や地下式坑、薬研堀等、多くの遺構を検出している。



北吉田ノシロタ遺跡 根がらみ材出土状況



矢田新遺跡 調査区東半遠景



# 平成 26 年度の発掘調査から

所 長 福島 正実

## 1 はじめに

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターは、平成 26 年度に石川県教育委員会から 20 件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省が 6 件、県民文化局 1 件、県環境部 1 件、県農林水産部 1 件、県土木部 10 件、県立中央病院 1 件であった。本号では平成 26 年度に当法人が実施した当法人が実施した発掘調査のうち、本誌第 33 号で紹介した 6 件以外の概要を紹介する。また、石川県金沢城調査研究所および県内市町等が実施した主な発掘調査の概要も紹介する。

## 2 (公財) 石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

中カワナミマエダ遺跡(輪島市)は中山間地域の小平地に立地する集落跡であり、古墳時代末～平安時代の掘立柱建物、溝等を確認し、縄文時代中期の土器も出土した。

北吉田ノシロタ遺跡(志賀町)は弥生時代から中世の集落で、新たに弥生時代後期の遺構面を検出、掘立柱建物や大型柱穴、大量の土器を含む自然河道を確認した。二所宮サンマイダ遺跡(志賀町)では集落遺跡中心部から流れ込んだ古墳時代から平安時代の須恵器、土師器が多量に出土した。

古府・国分遺跡(七尾市)は奈良・平安時代から中世の集落跡で、平成 25 年度調査区域隣接地を調査、遺構等は希薄で、遺跡の縁辺部もしくは空閑地にあたるものと考えられる。

細滝神社遺跡(かほく市)は砂丘地に立地する弥生時代の集落跡で、後期後葉から終末期の竪穴建物、土坑等を確認した。

福久遺跡(金沢市)は旧河北潟縁辺の低地部に立地する奈良・平安時代の集落遺跡で、礎板を備えた掘立柱建物、用水路等を確認し、土器、田下駄等の木製品等が出土した。戸水ホコダ遺跡(金沢市)では弥生時代～平安時代の集落跡の一角を調査し、土坑、溝を確認した。金沢城下町遺跡(東兼六 5 番地区)は曹洞宗寺院の旧墓地であり、18～19 世紀の土葬墓や火葬墓等を確認、越前焼大甕、木棺等から多数の人骨が出土した。金沢城下町遺跡(本多氏屋敷跡地区)は加賀藩筆頭年寄家の本多氏上屋敷跡にあたり、同屋敷庭園の一角を調査し、2 面の遺構面で土坑、大規模な掘削跡等を確認した。

二日市イシバチ遺跡(野々市市、白山市)は集落遺跡であり、上層面では溝で区画された室町時代の屋敷地、竪穴状遺構や井戸と推定される土坑等、下層面では弥生時代～古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物、土器捨て場を確認した。

一針 C 遺跡(小松市)は弥生時代から近世の集落跡で、上層面では古墳時代後期から中世の掘立柱建物や井戸等を確認、下層面では、弥生時代中期後半から古墳時代前期の平地式建物、掘立柱建物、土坑、溝、方形周溝墓、環濠等を検出した他、弥生時代後期から古代にかけての梯川旧流路とみられる堆積を確認した。漆町遺跡(小松市)は弥生時代から中世の集落跡で、中世の鑄造関係遺物の廃滓坑 50 基余を確認、当地の地区名「金屋」との関連が注目される。矢田新遺跡(小松市)では古墳時代～平安時代の掘立柱建物、竪穴建物、戦国時代の掘立柱建物・区画溝・地下式坑等を確認した。

加茂ボケ生水ウラ遺跡(加賀市)では弥生時代から中世の集落跡を確認し、中世では数棟の掘立柱建物、井戸または水溜とみられる遺構を確認した。

なお、上記調査以外の相坂遺跡、相神東シンカイ B 遺跡(以上志賀町)、南新保 E 遺跡(金沢市)、新庄カキノキダ遺跡(野々市市)、徳光聖興寺遺跡、徳光ヨノキヤマ遺跡(以上白山市)、加茂キツネ

塚遺跡、加茂フルドウ遺跡（以上加賀市）の本年度調査の概要については本誌第 33 号を参照されたい。

### 3 石川県金沢城調査研究所が実施した調査

金沢城調査研究事業の一環である「城郭庭園等の総合研究」のため、金沢城跡（金沢市）東ノ丸南部の 2 箇所が発掘調査が行われ、池と見られる窪地が存在する可能性が高まるとともに、景石の確認によって、庭園遺構の一角であることが明らかにされた。また、鼠多門・鼠多門橋の基礎的な情報を得るための試掘、ボーリング等が行われた。

### 4 市町が実施した主な調査

能登町は真脇遺跡（国史跡）の第二期史跡整備に向けた確認調査を行い、縄文時代晩期の「ほぞ」加工の角材の他、建物の板材、木柱根、土器、土製品、石器、石製品、骨等が出土した。また松波城跡の確認調査で礎石建物、柱穴、土塁、横堀を確認。珠洲焼や土師器が出土した。

七尾市は小島西遺跡で土坑や小穴を確認し、須恵器・土師器・越前焼が出土した。また、佐味今田谷内古墳群（旧藤平谷内古墳群）の前方後円墳の墳形・規模を確認、円墳 2 基の墳丘測量を行った。

羽咋市は東川原三俵刈遺跡を調査し、平安時代後期の土師器等が出土、柱穴状遺構・溝状遺構の他、地震の液状化による噴砂の痕跡が確認された。また、柳田シャコテ廃寺跡では古代寺院の塔基壇の規模を確認、心礎石跡とその根石も検出し、心礎構築技法について知見が得られた。津幡町は北国街道跡の道路遺構の状況を把握するために確認調査を行った。

金沢市は 5 件の調査を行った。直江ボンノシロ遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の方形溝、古墳時代初頭の平地式建物の周溝が確認された。大友 E 遺跡では弥生時代後期、同時代末の平地式建物の周溝が各 1 条、古墳時代前期の布堀建物 1 棟等が確認された。木越光徳寺跡は古代・中世の遺跡であり、寺院を区画するとみられる L 字形に屈曲する大溝が確認され、区画内部で掘立柱建物、井戸等が検出された。砂子坂道場跡では確認調査が行われ、平坦地、土塁、池状の窪み、石組井戸、堀等が確認された。土師器皿や越前焼甕、珠洲焼甕等が出土、15 世紀後半頃の遺跡とされた。金沢城下町遺跡関係では、飛梅町 3 番地点で大音家（4300 石、人持組）下屋敷地に相当する箇所が調査され、素掘井戸、地山天井の地下室、土取り穴、建物柱穴等を検出し、主に元和・寛永期以降の遺物が出土、江戸時代前期の区画溝が埋立てられて掘立柱の塀に変化したことが確認された。

野々市市は 4 件の調査を行った。二日市イシバチ遺跡では弥生時代後期の竪穴建物が 1 棟確認された。三日市ヒガシタンボ遺跡では古代の竪穴建物 1 棟、中世の土坑や溝等が確認され、中世の土坑から鉄鍋の完形品が出土した。徳丸ジョウジャダ遺跡では弥生時代の竪穴建物 1 棟、中世の竪穴状遺構 1 基、溝が確認された。末松廃寺跡（国史跡）は北陸最古の古代寺院で、築地塀の確認調査で昭和 41 年発見の大型柱穴を再確認され、瓦、土師器、須恵器が出土した。

白山市は 4 件の調査を行った。このうち安田三郎惟光館跡では中世の掘立柱建物、溝、土坑が確認され、土師器、珠洲焼、カマド裾石等が出土した。舟岡山城跡（市史跡）は室町時代に築城されたとされる山城で、石積み遺構が確認され、縄文土器、陶磁器が出土した。

能美市は湯屋古窯跡 A II 支群の確認調査を行い、須恵器窯 2 基の分布を確認した。小松市は蓮華寺跡の確認調査を行い、9 世紀代の須恵器、土師器が出土したが寺院跡の確定には至っていない。

加賀市は九谷磁器窯跡（国史跡）の整備のため 2 号窯と吉田屋窯の煙道部を再調査し、「朱田」周辺で石組溝の範囲を確認した。大聖寺城跡（市史跡）の確認調査では、二の丸北西側で防御施設の造成状況を把握し、対面所では生活面が 2 面確認された。

## 平成 26 年度 発掘調査遺跡位置図



### 平成26年度発掘調査遺跡

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	主な時代	関係機関	関係事業
1	○	なかカワナミマエダ遺跡	輪島市三井町中	1,500	縄文、奈良・平安	国土交通省	一般国道 470 号能越自動車道 (輪島道路)
2		相坂遺跡、相神東シンカイ B 遺跡	志賀町里本江、給分、相神	3,280	縄文～中世	県農林水産部	県営ほ場整備 (相神地区)
3	○	北吉田ノシロタ遺跡	志賀町北吉田	3,400	弥生～奈良・平安	県土木部	二級河川米町川
4	○	二所宮サンマイダ遺跡	志賀町二所宮	830	古墳、奈良・平安	県土木部	一般県道羽昨田鶴浜線
5	○	古府・国分遺跡	七尾市国分町	150	奈良・平安～中世	国土交通省	一般国道 159 号 (七尾バイパス)
6	○	細滝神社遺跡	かほく市二ツ屋	950	弥生	国土交通省	一般国道 159 号 (二ツ屋自歩道)
7	○	福久遺跡	金沢市福久町	1,500	奈良・平安	県土木部	一般県道蚊爪森本停車場線 (海側幹線Ⅳ期)
8	○	戸水ホコダ遺跡	金沢市鞍月 5 丁目	240	弥生～奈良・平安	県環境部	県水道用水
9		南新保 E 遺跡	金沢市鞍月東 2 丁目	4,350	弥生～中世	県立中央病院	県立中央病院
10	○	金沢城下町遺跡 (東兼六町 5 番地区)	金沢市東兼六町	1,550	近世	県土木部	急傾斜地崩壊対策 (東兼六 1 号)
11	○	金沢城下町遺跡 (本多氏屋敷跡地区)	金沢市出羽町	680		県県民文化局	県文化財保存修復工房
12	○	二日市イシバチ遺跡	野々市市二日市、白山市横江町	3,620	上層・中世下層、弥生～古墳	県土木部	二級河川安原川
13		新庄カキノキダ遺跡	野々市市新庄 1 丁目	510	縄文、奈良・平安	県土木部	二級河川高橋川
14		徳光聖興寺遺跡、徳光ヨノキヤマ遺跡	白山市徳光町	1,600	中世	県土木部	主要地方道金沢美川小松線
15	○	一針 C 遺跡	小松市一針町	7,600	上層・古墳～中世下層、弥生～古墳	国土交通省	梯川
16	○	漆町遺跡	小松市金屋町	1,000	弥生～中世	国土交通省	梯川
17	○	矢田新遺跡	小松市矢田新町	4,180	古墳～中世	県土木部	南加賀道路 (栗津ルート)
18		加茂キツネ塚遺跡	加賀市加茂町	450	弥生	県土木部	一般県道片山津山代線
19		加茂フルドウ遺跡	加賀市加茂町	715	古墳	国土交通省	一般国道 8 号 (加賀拡幅)
20	○	加茂ボケ生水ウラ遺跡	加賀市加茂町	3,190	弥生、奈良・平安、中世	県土木部	一般県道片山津山代線
計		20 件 (本号に掲載していない 6 件は 33 号に掲載済み)		41,295			

## なか 中カワナミマエダ遺跡

所在地 輪島市三井町中地内

調査期間 平成 26 年 10 月 1 日～同年 12 月 15 日

調査面積 1,500㎡

調査担当 久田正弘 神谷英生 萩山教俊



遺跡位置図 (S=1/25,000)

### 調査成果の要点

- ・中山間地域を流れる仁行川流域に展開する古墳時代末～平安時代を中心とする集落遺跡。
- ・4棟の側柱式掘立柱建物があり、2棟には柱筋溝状遺構が存在。

中カワナミマエダ遺跡は、三井町中集落の南東側から流れる中川などや、北東方向から流れる仁行川が合流する地点の西側に位置する。周辺は標高 200m 前後の山々が連なり、その谷間に広がる小平地が展開しており、遺跡は南側丘陵裾に広がる鞍部と仁行川の間にある微高地（標高約 93m）に立地する。発掘調査は能越自動車輪島道路建設に伴うものであり、昨年度調査区の西側を調査した。

北側はほ場整備で大きく壊されさていたが、南側には7世紀後半～9世紀代の須恵器・土師器・製塩土器などが出土し、4棟の掘立柱建物などを確認した。SB01（2×2間）・02（4×3間）には柱と柱の間に幅が狭くて浅い溝があり、縦板壁を据えた痕跡（柱筋溝状遺構）が存在した。東側にはSB03（4×3間）・04（4×2間）があり、ほぼ同じ位置に重なっているが、内側に位置するSB04がやや小さい。SB02～04の南北方向の柱間は、東西方向の柱間よりかなり狭い傾向が伺える。掘立柱建物の南側には鞍部が広がっており、SD01には小砂利などが敷き詰められており、古代以降の道路跡と思われる。

鞍部から、縄文時代中期中葉（上山田式）の深鉢が出土したが、調査区全体では縄文土器や石器の出土は少量なことから、近くに縄文時代の集落が存在した可能性があろう。（久田正弘）



調査区全景（東から）



中カワナミマエダ遺跡全体図 (1/400)



掘立柱建物 (SB01、南から)



掘立柱建物 (SB03、南から)



掘立柱建物 (SB02、南西から)



鞍部出土の縄文土器

# ふるこくぶ 古府・国分遺跡

所在地 七尾市国分町地内

調査期間 平成26年11月25日～同年12月11日

調査面積 150㎡

調査担当 熊谷葉月 武部修一



遺跡位置図 (S=1/25,000)

古府・国分遺跡は史跡能登国分寺跡附建物群跡の周囲に展開した、古代・中世の遺跡である。当センターでは国道157号七尾BP建設に伴い、平成17・18・24年度に本遺跡の発掘調査を実施してきた。平成25年度はこれまでに調査未了であったE区、P区、Q区、R区を調査した。このうち国道本線部分は遺跡東端のため遺構が希薄なP区のみであり、また他の調査区はいずれも幅が狭いため、全形が判明した遺構は少ない。

平成26年度は、平成25年度P区北端と平成18年度調査区北東端に挟まれた、旧ポンプ場部分について調査した。遺構、遺物の分布状況等から集落の縁辺部もしくは集落内の空閑地としての性格が想定される。(熊谷葉月)





遺構検出作業



調査区全景（北から）

# きた よし だ 北吉田ノシロタ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町北吉田地内

調査面積 3,400㎡

調査期間 平成26年4月22日～同年11月17日

調査担当 金山哲哉 関 晃史



遺跡位置図 (S=1/25,000)

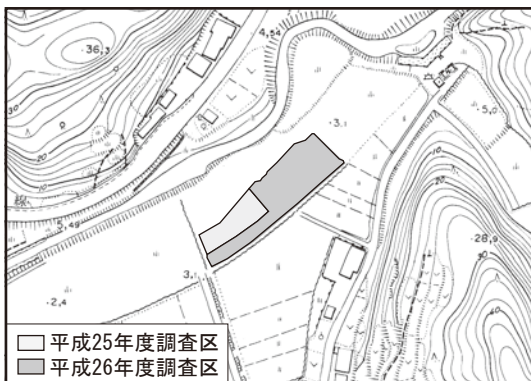
## 調査成果の要点

- ・米町川流域の微高地上に立地の、弥生時代終末から古墳時代前期を中心とする集落跡で、2面を調査した。
- ・第1面は弥生時代終末から古墳時代前期を中心とする時期に、第2面は第1面とほぼ同時期の遺構が少ないものの、一部は弥生時代後期後半に位置付けられる。
- ・第1面を中心に、1間×1、2間の建物を主体とする掘立柱建物柱穴を多数検出した。多くは小柱穴であるが、第1面では根がらみ材を配した直径約1mの複数の柱穴を、第2面では長辺50cm以上の礎板を設置した、1辺約70cmの柱穴の建物1棟を確認した。

北吉田ノシロタ遺跡は、羽咋郡志賀町北吉田地内に位置する弥生時代から中世の集落跡である。遺跡は、北吉田集落の北側を南西方向に流れる米町川の左岸に立地しており、周囲には水田地帯が広がる。米町川の河川改修を原因とする平成25年度調査に続く第2次調査であり、今回は第1次調査区の北東側を対象区域とする。当初は前年度同様1面調査の計画の下、調査に着手したが、調査中に下層面の存在を確認。これを受けて、1面3,500㎡を対象とする計画を、1回目に表土を除去した範囲の2,100㎡に減じ、これに同下面で確認した第2面の1,300㎡を合わせた、累積3,400㎡に変更することとなった。

第1面は弥生時代終末から古墳時代前期を中心とし、北吉田集落側の埋没河道砂層上面と米町川側のシルト質地山域、標高2.2～2.3mに展開する。遺構の主体は掘立柱建物で、シルト質地山域にとどまらず河道部の砂層堆積域でも確認した。配置や規模を復元できたものは数棟にとどまったものの、多くは1間×1、2間と考えられ、礎板をともなった直径30cm前後大の柱穴によって構成される。

第2面については、調査区の北東側約1/3を占める河道域を除く、米町川側のシルト質地山域、標高2.1m付近を中心に展開する状況が確認された。時期については、第1面とほぼ同時期の遺物を出土する遺構が少なくなかったものの、一部は弥生時代後期後半に遡ると考えている。注目される遺構としては、建物配置・規模ともに不明ではあるが、米町川側の区域で検出した直径1m前後大の複数の柱穴を挙げる事ができる。これらには柱材は遺存しなかったが、底端部を二股に加工した柱との組み合わせが考えられる枕木や、柱を固定するように配置した横木などの根がらみ材が出土している。



調査区位置図 (S=1/5,000)

また、第1次調査区と接する位置で1間×2間の掘立柱建物1棟を確認している。同建物柱穴は1辺が70cm前後の平面隅丸方形を呈し、6基の柱穴全てに、長辺が50cm以上の礎板が設置されていた。柱穴から得られた土器片が少量・小片のため判断が難しいが、弥生時代後期後半に位置付けられるものと考えられる。調査は北側の区域を対象に、今年度も実施している。(金山哲哉・関 晃史)



第1面遺構完掘状況（南東から）



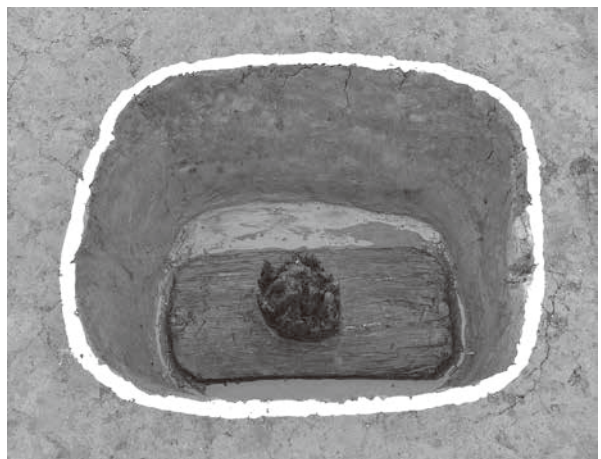
第1面掘立柱建物柱穴群（北東から）



第1面大型柱穴枕木出土状況



第2面掘立柱建物完掘状況（南から）



同左柱穴柱根・礎板出土状況

## に<sup>しよのみや</sup>所宮サンマイダ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町二所宮地内

調査期間 平成26年11月4日～平成27年1月5日

調査面積 830㎡

調査担当 立原秀明 瀧野勝利



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査地遠景 (南から)

遺跡は眉丈山系の丘陵裾に立地しており、東方は旧福野潟からのびる低湿地が広がっている。発掘調査は、県道羽咋田鶴浜線の現道拡幅工事に伴うものである。

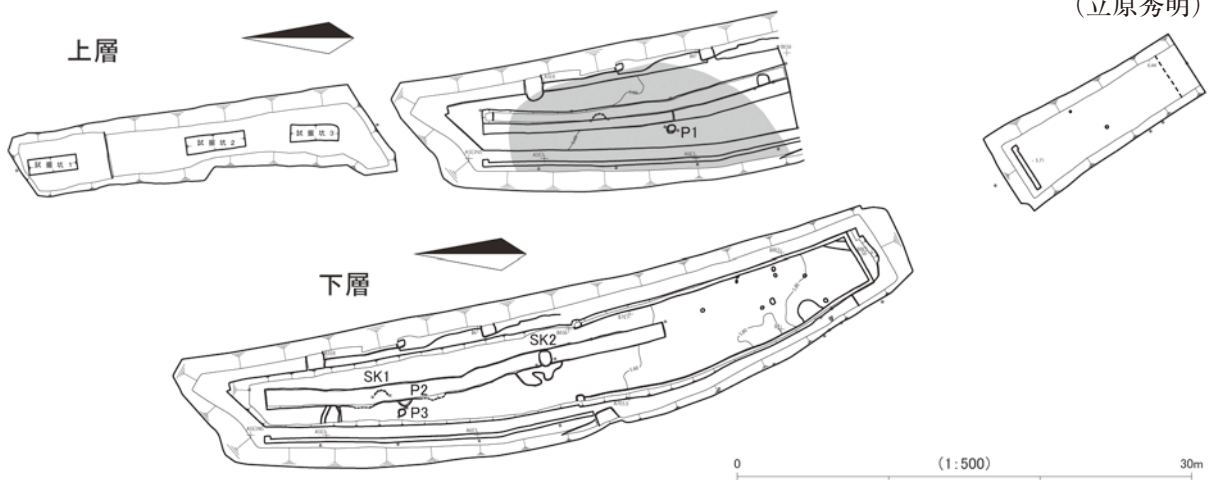
調査地北側では、全体図の網掛け範囲において古墳時代から平安時代の土器を多量に包含する層を検出した。この層に伴う遺構は小穴を1基検出するのみであり、土器量に比べて遺構が極端に少ないことから、多量の土器は西側高所に位置する現集落側からの流れ込みであり、遺跡の中心は現集落側にあるものとみられる。

さらに、小穴を確認した層も流土とみられたことから、南北方向に土層確認用のサブトレンチを設定し、地山までの層序を確認したところ、前述の土器層の30cmほど下位で新たに遺構面を確認した。これにより、多量の土器が出土した層を上層とし、下位の遺構面を下層として調査を行った。

調査地南側の上層では、流れ込みの土器をわずかに確認したが、全体的には過去に削平を受けていることを確認した。

下層では、土坑と小穴を検出した。遺構からの出土遺物はなかったが、サブトレンチ内から縄文土器が出土していることから、この時期の遺構である可能性が高い。土坑の性格としては、低湿地際にあることから貯蔵穴等の性格が考えられる。

(立原秀明)



二所宮サンマイダ遺跡全体図

# ほそ たき じん じゃ 細 滝 神 社 遺 跡

所在地 かほく市二ツ屋地内

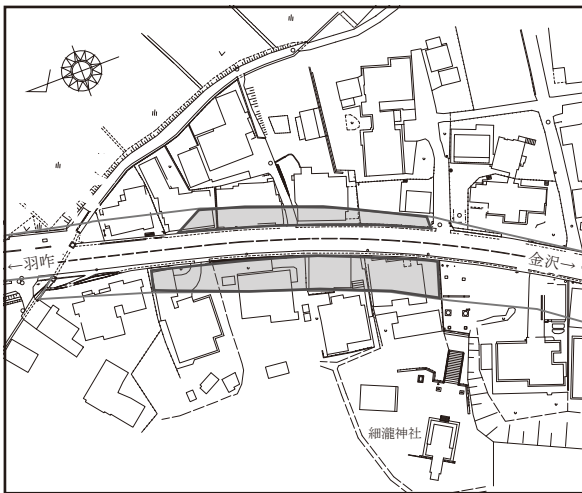
調査期間 平成 26 年 10 月 7 日～同年 12 月 3 日

調査面積 950㎡

調査担当 澤辺利明 瀧野勝利 武部修一



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/2,000)



調査地から北方を望む

遺跡は、能登半島の基部を占めるかほく市北端にあって、海岸砂丘内側裾に立地する。眼前には加賀と能登を境する大海川を望み、周辺の地表標高は9.3～11.4 m、西から北・東に緩やかに下る地形をなす。遺構検出面標高は8.8～10.7 mを測る。

調査は一般国道 159 号二ツ屋北自歩道整備事業に係るもので、現道両側が調査対象である。

調査の結果、最大で 1.5 m 堆積した砂の下で、弥生時代後期後葉～終末期の竪穴建物 1 棟や土坑、小穴などを、主に調査区南半部で確認した。竪穴建物は一辺約 6 m、平面方形ないし不整形を呈し、深さ約 40cm、壁溝を持つ。内部からは多数の土器が出土したが、細かい砂の中に埋もれていたためか遺存良好なものが多い。土器に混ざって勾玉 1 点も出土した。

調査区域の北半部は、風雨等による侵食や後世の削平を受けており、弥生時代の生活面や遺物包含層は削平されていた。

また、縄文時代後期前葉の土器が 1 点出土しており、周辺に該期の遺跡が存在する可能性がある。  
(澤辺利明)



勾玉 (原寸)



竪穴建物 (西から)

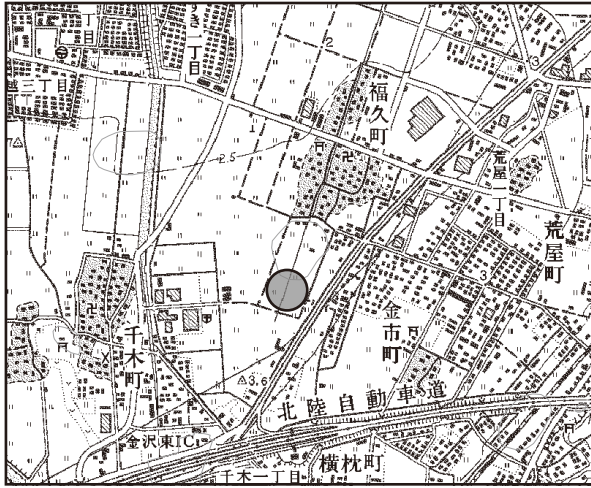
## ふくひさ 福久遺跡

所在地 金沢市福久町地内

調査期間 平成26年10月1日～同年12月5日

調査面積 1,500㎡

調査担当 林 大智 関 晃史 神谷英生



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区全景 (B区、東から)



掘立柱建物 (北から)



田下駄出土状況 (西から)

福久遺跡は、金沢市街地の北方郊外に位置し、森下川と金腐川に挟まれた旧河北潟縁部の低地に立地する弥生・古代の集落遺跡である。調査は金沢外環状道路（海側幹線Ⅳ期事業）を原因とする。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の掘立柱建物、小穴、用水路と考えられる溝、河道を検出した。

掘立柱建物はB区中央の南端で検出した。梁行2間、柱間寸法が1.8 mを測る側柱構造の建物で、柱穴3基の底には礎板が備えられていた。礎板には方形孔が穿たれており、切断した建築部材などを転用したものである可能性が高い。

用水路と考えられる溝は南北方向に流れるものが主体で、調査区のほぼ全域に確認できる。溝の覆土からは田下駄などの木製品が出土すると共に、調査区内で建物などの居住施設が希薄であることから、今回の調査地点が奈良・平安時代における集落の縁辺部にあたり、周囲に水田を主体とする生産域が広がっていたことを推測できる。

河道覆土（砂礫層）では少量の弥生土器を確認できるが、上流域からの流れ込みと判断される。

なお、平成27年度には南側隣接地の発掘調査が予定されており、居住施設を中心とした更なる調査成果が期待される。(林 大智)

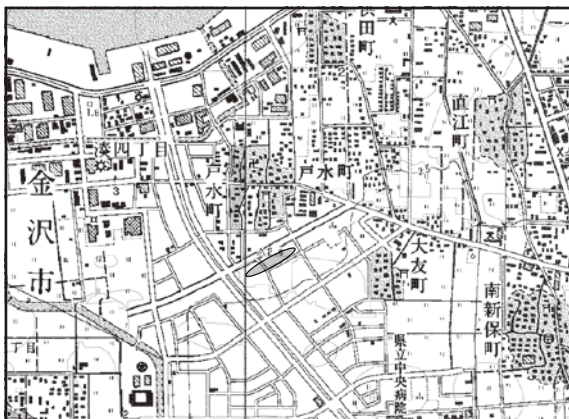
## とみず 戸水ホコダ遺跡

所在地 金沢市鞍月5丁目地内

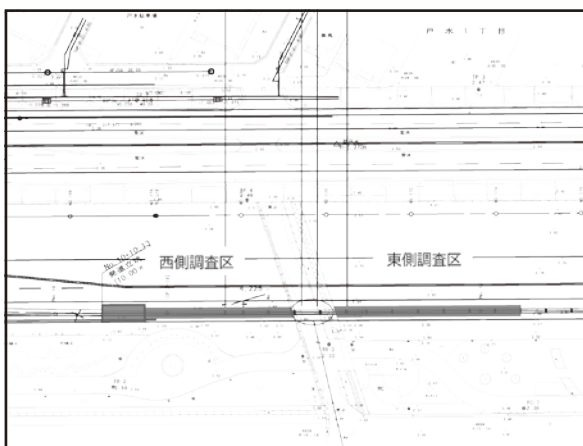
調査期間 平成26年11月11日～同年12月15日

調査面積 240㎡

調査担当 水田 勝 岩瀬由美



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図



西側調査区完掘状況



東側調査区完掘状況

本遺跡は金沢市内を貫流する犀川と浅野川によって形成された沖積平野に立地し、金沢港までは北に約1kmの距離に位置する。

石川県水道水供給事業に伴い、発掘調査を行った結果、調査区の大半は後世の削平等によって遺構が失われていたが、部分的に弥生時代から平安時代と推定される土坑や溝などを検出し、土師器や須恵器が出土した。また、耕地整理前に利用されていたと推定される溝も検出した。この溝は、平成3年度に金沢市教育委員会が調査した際に検出された溝の延長に当たると推定された。

調査区が狭小であることから全体像は捉えられなかったが、金沢市教育委員会の調査では弥生時代後期～古墳時代前期と古代に帰属する掘立柱建物等が検出されており、今回の調査成果とも年代的に矛盾がないことから、集落の北東辺部の一角であると判断される。(岩瀬由美)

かなざわじょうかまち 金沢城下町遺跡 (ほんだしやしきあと 本多氏屋敷跡地区)

所在地 金沢市出羽町地内

調査面積 680㎡

調査期間 平成26年11月4日～同年12月26日

調査担当 金山哲哉 中川京太郎



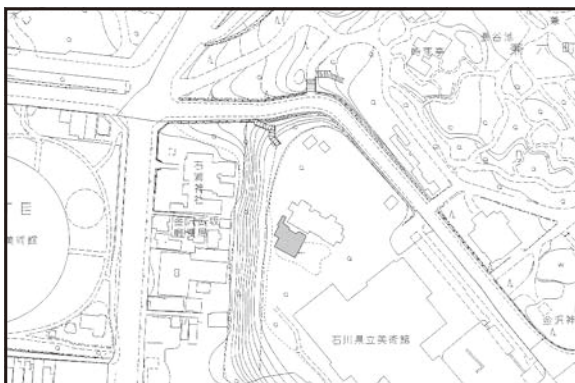
遺跡位置図 (S=1/25,000)

金沢城下町遺跡(本多氏屋敷跡地区)は、小立野台地北西部「本多の森公園」の一帯に広がる、加賀藩前田家の筆頭年寄家、本多氏の屋敷地の遺跡である。

調査は石川県文化財保存修復工房整備事業を原因とし、本多の森公園広坂園地内に位置する石川県立美術館広坂別館庭園部340㎡を対象に行った。同地は本多氏上屋敷地として知られ、慶長16(1611)年、あるいは17年には調査地を含む石川県立美術館寄りの区域に位置し、以後幕末まで同氏の本拠地としての利用された区域であった。なお、調査区の絵図上の詳細な位置については、宝暦大火以前と推定される

『本多家上屋敷絵図』(金沢市立玉川図書館蔵)などの絵図にみえる築山と、同遺構と指摘される広坂園地内の築山との位置関係から、上屋敷建物・築山間の庭地付近に当たるものと考えられる。

調査の結果、整地層上面と同整地層下地山面上で、上下2遺構面を確認した。第1面では標高46m付近で多数の土坑や溝を、第2面では標高45.5～45.8mで同じく土坑や溝のほか、南西側へ広がる落ち込みを検出した。同落ち込みは、調査区北壁付近から南方向に扇状に開く平面形を呈し、底面は深みが点



調査区位置図 (S=1/5,000)

在する不整形な状態であった。その形状から、絵図にはみられない上屋敷庭園に付属する池の可能性も考えられたが、護岸や水成堆積、腐植物層などその存在を裏付ける痕跡を確認することはできなかった。出土遺物が極めて少なく不明な点が多いものの、第1面は幕末頃に、第2面については幕末以前の近世に位置付けられると推察される。確認した遺構についても、本多氏上屋敷に関連する可能性が高いものとして、今後検証していく必要があるものと考えられる。(金山哲哉・関 晃史)



第1面遺構完掘状況 (南から)



第2面落ち込み遺構完掘状況 (南東から)

かなざわじょうかまち 金沢城下町遺跡 (ひがしけんろくまち 東兼六町5番地区)

所在地 金沢市東兼六町地内

調査期間 平成26年4月28日～同年10月27日

調査面積 1,550㎡

調査担当 和田龍介 中川京太郎



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・江戸時代の城下町遺跡（墳墓跡）である
- ・昨年度に続く鶴林寺の旧墓地跡に加え、隣接する雲竜寺（曹洞宗）の旧墓地跡の調査を実施した。
- ・土葬（甕棺、木棺）が主体。蔵骨器から江戸時代に比定できる火葬墓を確認することができた。

平成25年度に実施された調査の継続である。今年度は鶴林寺旧墓地跡に加え、新たに隣接する雲竜寺（曹洞宗）旧墓地跡の調査を実施した。両寺の旧墓地跡は寺の背後の崖地に営まれていたもので、崖地の保全を目的とする

急傾斜地崩壊対策工事を契機として調査に至ったものである。

【鶴林寺調査区】墓の移転の都合で、平成25年度に調査に至らなかった旧墓地の下段部分の調査を実施した。下段部分は大きく2段の平坦面で構成され、表層の腐植土層を除去すると移転時（第1面）に残された墓地の基礎や火葬蔵骨器を確認することができた。火葬蔵骨器は土師質のものと、磁器製のものの2種類が出土し、土層や出土状態から近代以降のものと推定される。第1面の段階で越前焼甕が検出されたことから下層確認のトレンチを設定・掘削したところ、江戸時代のものと考えられる木棺の痕跡や越前焼甕の破片が出土し、平成25年度に調査した上段同様に江戸時代中～後期の墓地面（第2面）の存在を確認した。第2面については調査期間の制約から平成27年度に実施することとした。

【雲竜寺調査区】鶴林寺調査区以上の急斜面であり、表土掘削をはじめ調査はほとんど人力に頼らざるを得ない状況であった。調査員・作業員は安全帯を着用、掘削残土の搬出にはモノレールを用い、調査の足場などの確保に仮設足場を設置するなど作業の安全確保を最優先に調査を実施した。現況の地形では最上段の狭い範囲と最下段の一部にのみ平坦面が残存しており、斜面に設定したトレンチ調査では崩落の痕跡が見られた。雲竜寺調査区でも第1面・2面が確認され、第1面では墓の基礎や残された墓標が検出されたが、墓に伴う甕や蔵骨器等は出土せず、移転時にほぼ搬出されたものと理解される。第2面は特に南側で崩落等による基盤層の消失が見られたが、木棺（長方形棺）が多く見られ、中には同地点に3基の木棺が重なって検出されたものもあった。また18世紀代の肥前甕を蔵骨器として用いた火葬墓を検出した。このことにより、雲竜寺の旧墓地跡では18世紀代は同じ墓地内で火葬と土葬が併存し、また土葬でも甕棺墓と木棺墓が同時期に営まれるなど墓制の多様性を確認することができた。

(和田龍介)



廃絶直後の墓地区画の状況（雲竜寺調査区）



木棺墓掘削状況



肥前焼蔵骨器出土状況

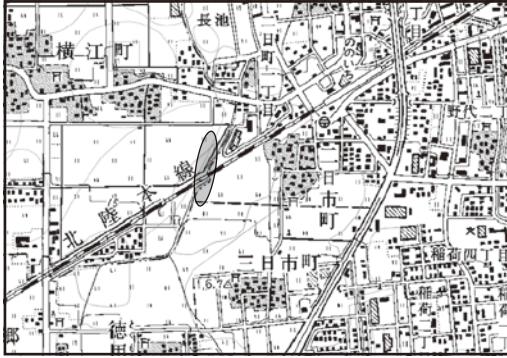
## ふつ か いち 二日市イシバチ遺跡

所在地 野々市市二日市町・二日市1丁目地内、白山市横江町地内

調査期間 平成26年4月23日～同年11月18日

調査面積 3,620㎡

調査担当 水田 勝 岩瀬由美



遺跡位置図 (S=1/25,000)

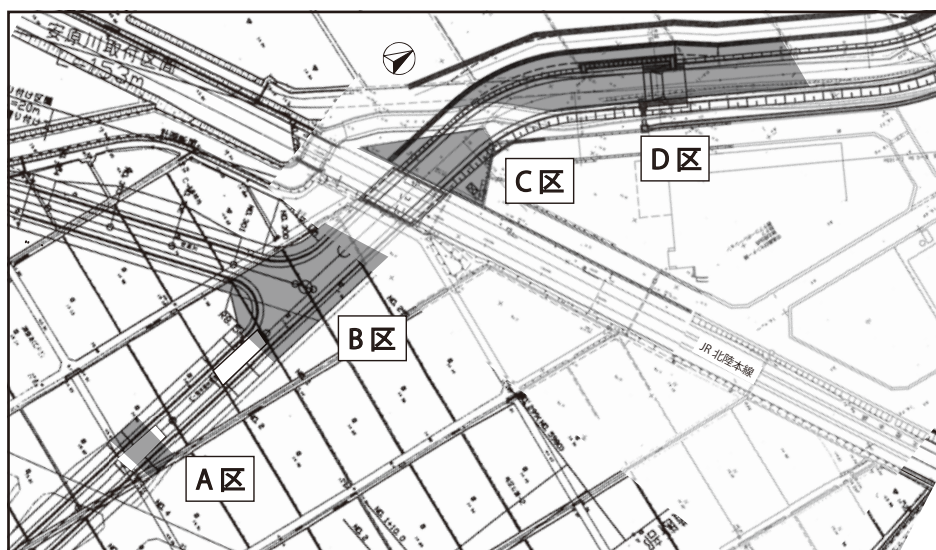
### 調査成果の要点

- ・部分的に上下二面の遺構面を確認した。
- ・弥生時代～室町時代の複合遺跡を確認した。
- ・下層では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落を確認した。
- ・上層では主に室町時代の集落を確認した。

二日市イシバチ遺跡は、JR野々市駅から南西に約0.5kmのJR北陸本線を挟んだ南北両側に広がっている。手取川扇状地の扇端部に立地することから、かつては小河川の作用により細かい微高地と低地が複雑に入り組んだ地形が形成され、そうした微高地上に遺跡が形成されている。現在では耕地整理などにより地形の細かい起伏は平定されているが、包含層は良好に遺存しており、部分的に上下二層の生活面を確認した。

下層では弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺構・遺物が確認された。主体となるのは古墳時代初頭で、B区で掘立柱建物、布掘り建物とともに、多量の土器が帯状に出土した土器溜まりなどを確認したほか、C区でも竪穴建物1棟を検出している。下層遺構はD区では殆ど確認されなかったことから、集落はJR北陸本線以南を中心に展開していたと推定された。

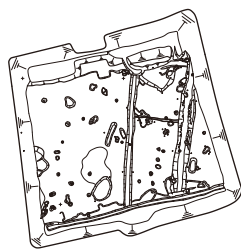
上層では主に室町時代の集落跡を検出した。A～D区の全ての調査区で遺構を確認しているが、掘立柱建物の検出は部分的であり、屋敷地が点在する様相が看取された。屋敷地は、溝によって区画されており、D区では区画内に竪穴状遺構や井戸と推定される土坑などを検出した。(岩瀬由美)



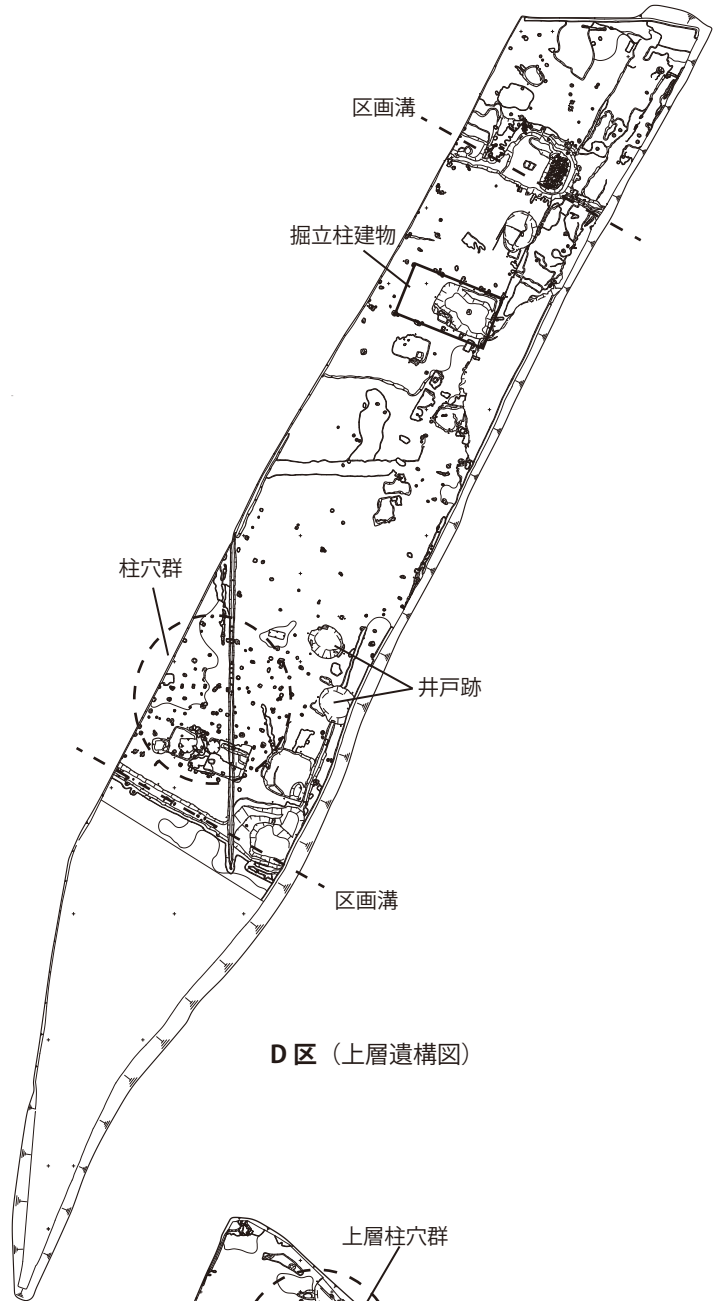
調査区割り



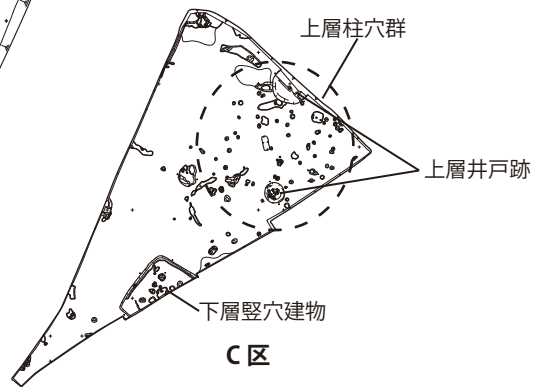
B区



A区



D区 (上層遺構図)



C区



遺跡全体図 (S=1/600)



A区完掘状況



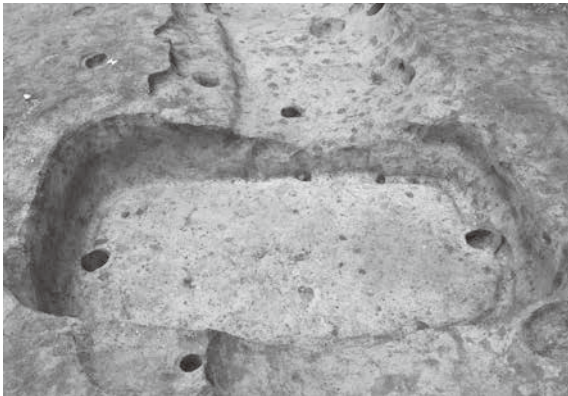
B区遠景



B区土器溜まり（下層）



B区布掘り建物完掘状況（下層）



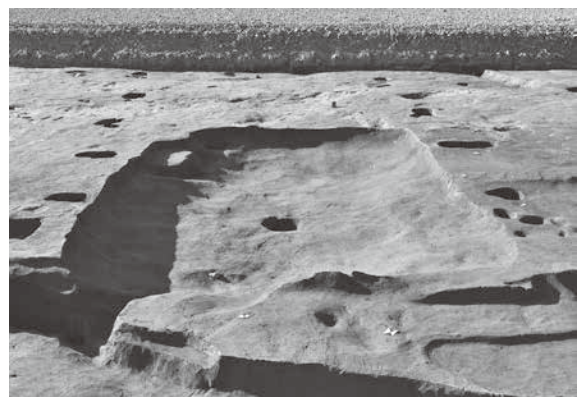
B区土坑完掘状況（下層）



C区豎穴建物調査風景（下層）



D区遠景



D区土坑完掘状況（上層）

ひとつはり  
一針C遺跡

所在地 小松市一針町地内

調査期間 平成26年5月12日～平成27年2月13日

調査面積 7,600㎡

調査担当 浜崎悟司 久田正弘 中森茂明 安中哲徳  
萩山教俊 山場愛弓 横山純子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

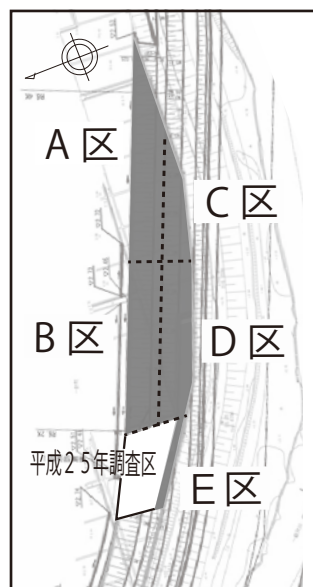
調査成果の要点

- ・一部で上下2層の遺構面を確認した。
- ・梯川旧流路の蛇行痕跡を確認した。
- ・弥生時代中期の環濠や弥生時代中期～古墳時代前期の平地式建物、掘立柱建物、井戸などの遺構を多数検出した。
- ・弥生時代の集落域に重複し、方形周溝墓や土坑墓などの墓域を確認した。
- ・廃棄時に多量の自然石や宝篋印塔、石臼、石鉢、木製品、漆器椀、木柄付包丁などが投げ込まれた中世の井戸を確認した。

一針C遺跡は、小松市北部を流れる梯川中流域右岸の沖積平野に位置する。平成10年に県営ほ場整備事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡である。梯川の旧流路やその支流に沿った自然堤防とみられる微高地上に立地していたと考えられ、南北700m、東西350mの範囲に南北方向に長く分布する。後世の耕地整理により現況は平坦な水田となっており、遺跡は水田下の標高約2m前後の面で検出できる。



今年度は昨年度に引き続き梯川改修築堤工事事業に伴い、遺跡の南端部分にあたる梯川右岸堤防の北側を対象として調査した。昨年度の調査では、中世の遺構を検出した上層と弥生時代の遺構を検出した下層の2つの遺構面を確認し、弥生時代～中世の遺跡であることが判明した。今年度は昨年度調査区の東側を広大な調査区を5つ(A～E区)に分けて発掘調査を行い、弥生時代～中世の遺構が重なりながら1つの面に密集する範囲(A・C区)と、梯川の旧流路などの影響から、古代・中世の遺構を検出した上層、弥生時代中期～古墳時代前期の遺構を検出した下層の上下2面の遺構面の範囲(B・D・E区)を確認し、弥生時代から中世の集落および墓域を検出した。



平成26年度調査区割図



調査区の全景（A・B区上層）（南東から）



弥生時代の平地式建物周溝や土坑などの掘削作業風景（A区上層）

上層では、古墳時代後期から中世末の掘立柱建物、柵列、井戸、竪穴状遺構、土坑、溝、T字状に伸びる畦状遺構、畝溝、小穴などの遺構や近世以降の梯川旧流路を検出した。

下層では、弥生時代中期後半から古墳時代前期の平地式建物、掘立柱建物、土坑、溝、小穴、方形周溝墓、土坑墓、環濠などの遺構を検出したほか、弥生時代から古代にかけての梯川旧流路とみられる堆積を確認した。

遺物は、多量の弥生土器をはじめ、土師器、須恵器、珠洲焼や越前焼、青磁、白磁などの陶磁器、メンコ状の円盤状土製品・陶製品、勾玉、管玉などの玉作り関連遺物、石鏃、砥石や石斧、石臼などの石製品、漆器碗や網カゴ、タモ網枠木、鋏、箸、曲物などの木製品、銅銭、鉄斧、柄付き包丁などの金属製品が出土した。

今回の調査の結果、新たに弥生時代中期後半頃に掘削された環濠とみられる区画溝や弥生時代中期～古墳時代前期の平地式建物・掘立柱建物が複数発見されたことに加え、方形周溝墓や土坑墓などの墓域が集落域と混在して存在するなど、弥生時代集落の様相を具体的に把握することができた。

その様相や変遷から、南西約2.5kmの小松駅東側周辺に位置し、弥生時代中期に南加賀地域における大規模な拠点集落として中核となっていた、八日市地方遺跡が衰退期を迎えた弥生時代中期後半頃、一針C遺跡は環濠を伴いながら成立し、古墳時代前期頃まで集落が存続していたことが判明した。

北東側に近接し、同時期に集落を営む一針B遺跡や千代・能美遺跡、梯川対岸の南側に位置する漆町遺跡とともに、梯川中流域における中心集落としての役割を担っていた可能性が考えられる。

また、古代～中世集落の様相については、現時点で不明な点も多く、遺構密集地点における掘立柱建物の復元や集落の時期変遷の検討に加え、中世墓地の検討などは今後の課題といえよう。

次年度に予定されている残りの発掘調査や今後の整理作業を通じて遺跡の状況はより明らかになるものと思われる。  
(中森茂明・安中哲徳)



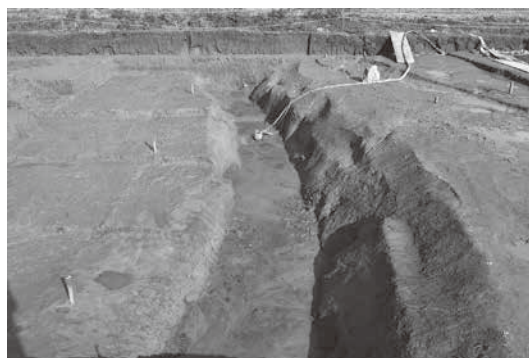
中世井戸からの木製柄付き包丁・タモ網枠木・網カゴ等出土状況（A区上層）



中世の畦状遺構・柵列等の検出状況（D区上層）



弥生時代の土坑墓掘削作業風景（C区上層）



弥生時代の環濠検出状況（B区下層）



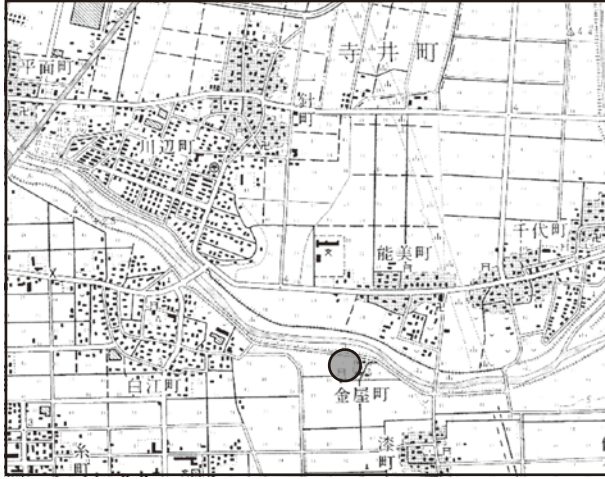
うるしまち  
漆町遺跡

所在地 小松市金屋町地内

調査期間 平成 26 年 10 月 3 日～同年 12 月 12 日

調査面積 1,000㎡

調査担当 浜崎悟司 中森茂明



調査成果の要点

- ・調査区西縁で近世の梯川本流の蛇行痕跡を検出した。
- ・調査区東隅で近世の河川の肩を検出した。
- ・調査区南部で中世の鋳物鋳造にかかる廃滓坑を多数検出した。

遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は、昭和 50 年代に広く発掘調査が行われており、加賀地方屈指の古代・中世の集落遺跡として知られている。今年度は、梯川改修築堤工事事業にともない、遺跡北端部、梯川左岸沿いの金屋町地内の調査を行った。

遺跡は調査区の北西と北東方向を、近世以降に埋没した河川によって開削されていたため、遺構は概して希薄であったが、現集落に近づくにつれ、検出面レベルが上昇し遺構密度も増し、3～9 世紀頃の溝、小穴を確認した。従来調査されてきた「漆町遺跡」の一部とみられる。また調査区西縁で 18 世紀頃の河川 1 を、調査区北東隅で 19 世紀頃の河川 2 を検出した。金屋地区は、かつては梯川右岸にあったが、明治初期に治水のために直線化された結果、左岸に位置するようになった。このことから今回検出された河川は、直線化前の古川本流の蛇行の痕跡とみられる。



調査区全景 (北西から)

調査区南西部で中世の鑄造関係遺物を廃棄した土坑（廃滓坑）群が検出された。廃滓坑は調査区南西部のほぼ全面で約 100 基が検出された。その形状は円形ないしは楕円形で、深いものは約 50cm、浅いもので約 10cmを測る。滓とともに鑄型とみられる素焼きの被熱品を出土した。

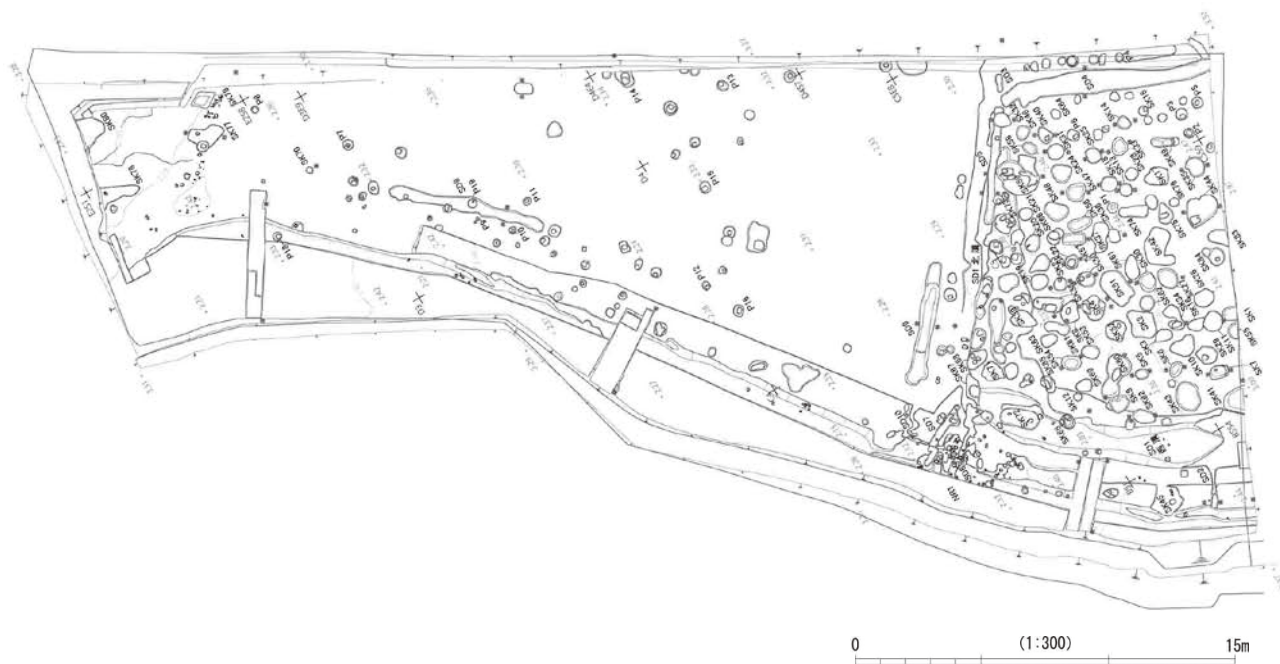
『加賀志徴』には「金屋の邑名はいにしへ此地に金屋鑄物師の居たる故に」とあり、中世の一時期には鑄物師など 300 戸もの居住があった。また地区の各地から鉄滓や鉄器類の破片が大量に出土したことも伝えられている。地区の住民の間にも鑄物師に関する伝承が現在までも継承されており、今回の調査結果はそれらに符合するものとなった。 (中森茂明)



鑄型か（上：外面、下：内面）



廃滓坑群完掘状況（南東から）



主要遺構配置図（S = 1/300）

# や た しん 矢 田 新 遺 跡

所 在 地 小松市矢田新町地内

調査期間 平成 26 年 5 月 9 日～同 27 年 1 月 14 日

調査面積 4,180㎡

調査担当 白田義彦 矢部史朗 神谷英生



遺跡位置図 (S=1/25,000)

## 調査成果の要点

- ・飛鳥時代、奈良・平安時代、室町・戦国時代の3時期にわたる集落跡を確認した。
- ・飛鳥時代の竪穴建物、溝を検出し、須恵器、土師器、石製紡錘車等の遺物が出土した。
- ・奈良・平安時代の遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、区画溝等を検出し、須恵器、土師器、鍛冶関係遺物等が出土した。
- ・室町・戦国時代では、掘立柱建物、地下式坑、竪穴状遺構、土坑、薬研堀、柵列等、多くの遺構を検出し、陶磁器、石鍋、石臼、行火、鉄製品、土錘等が出土した。

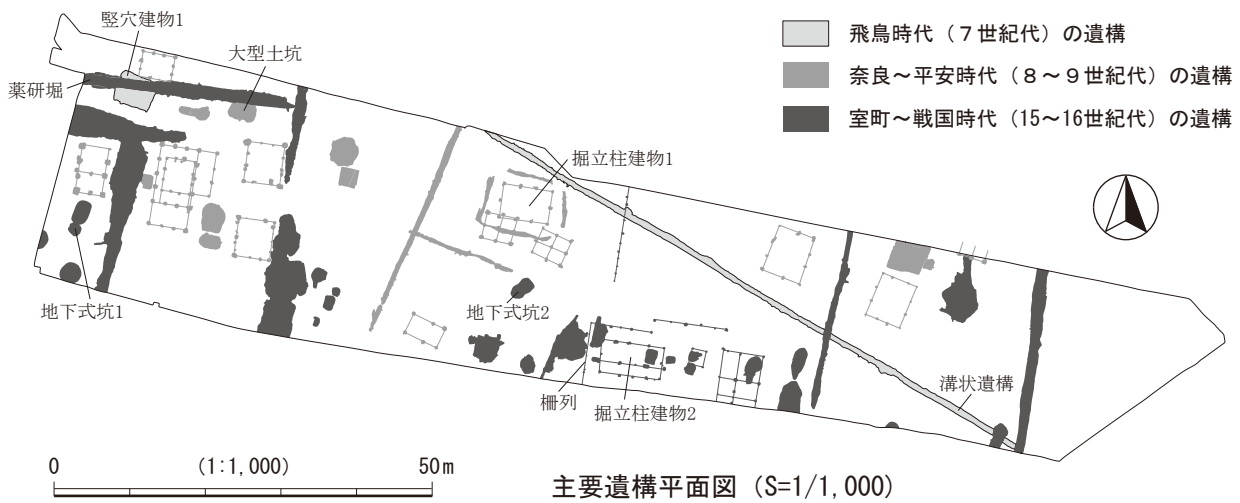
矢田新遺跡は、小松市南部、柴山潟を望む矢田野台地の西側、標高8～9mに立地する。調査は地方道改築事業南加賀道路（栗津ルート）の建設に伴い実施された。今年度の調査では、飛鳥時代（7世紀代）、奈良・平安時代（8～9世紀代）、室町・戦国時代（15～16世紀代）の3時期に大別される集落跡を確認した。

飛鳥時代（7世紀代）の遺構数は少なく、一辺4～5m、深さ30cmを測る竪穴建物1と幅70cm、長さ80m以上にわたる溝を検出した。竪穴建物1は貼床が施されており、須恵器、土師器、石製紡錘車の遺物が出土した。当該時期の集落は、主に調査区より北側及び西側に展開するものと推定される。

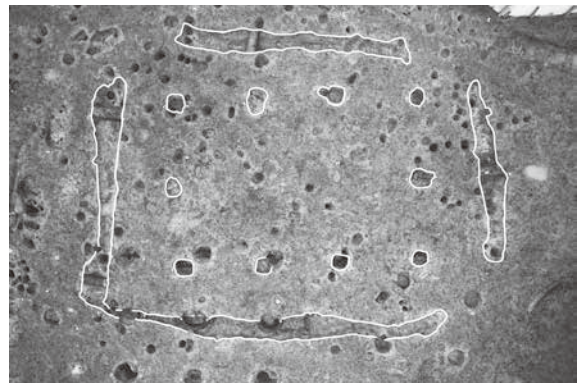
奈良・平安時代（8～9世紀代）では、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、区画溝等を検出した。調査区西部で検出された大型土坑1などから鉄滓、鉄床石、フイゴ羽口等の鍛冶関連遺物が出土しており、当地において鍛冶が行われていたと考えられる。また、調査区中央部では、西部の掘立柱建物等の遺構群と同軸方位を有する周溝を備えた掘立柱建物1（2×3間）も検出されており注目される。

室町・戦国時代（15～16世紀代）では、掘立柱建物、地下式坑、竪穴状遺構、土坑、薬研堀、柵列等を検出した。大型の掘立柱建物2は、周囲で検出された柵列が調査区より南側へ延長しており、建物域が拡張することも想定される。今回検出した2基の地下式坑は、竪穴と地下の横穴が連結して構成される遺構であり、竪穴の平面形は円形で、直径約2m、深さ2.2～3mを測る。横穴の天井部はアーチ状であり、床面は、地下式坑1では、2.1×3.3mの隅丸長方形、地下式坑2では、2×2mの隅丸方形を呈する。また、地下式坑1の横穴床面付近から15世紀代の播鉢片が出土した。中世の地下式坑は、小松市南東部の丘陵地帯において多数確認されているが、矢田野台地での確認は本遺跡が初めてであり、用途の解明が期待される。

(矢部史朗)



竪穴建物1 遺物出土状況（西から）



掘立柱建物1 完掘状況（上空から）



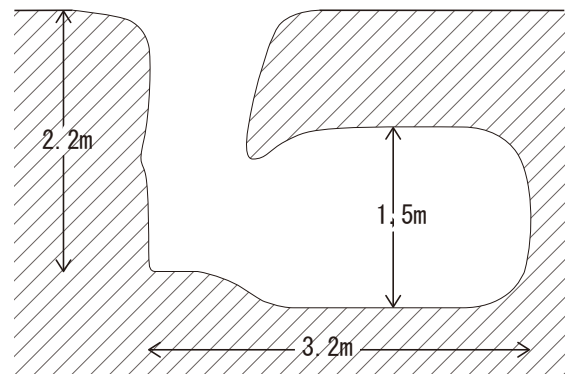
大型土坑 遺物出土状況（北から）



薬研堀 完掘状況（西から）



地下式坑1 天井部除去後、完掘状況（東から）



地下式坑2 断面図

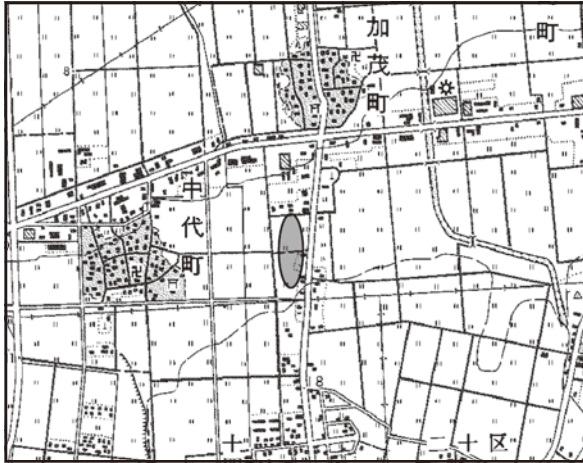
# 加茂ボケ生水ウラ遺跡

所在地 加賀市加茂町地内

調査期間 平成26年5月13日～同年10月27日

調査面積 3,190㎡

調査担当 立原秀明 武部修一



遺跡位置図 (S=1/25,000)

## 調査成果の要点

- ・ 調査地の北側で弥生時代終末期から古墳時代前期、奈良時代、中世の遺構を確認した。
- ・ 弥生時代終末期から古墳時代は、主に土坑や溝を検出した。
- ・ 中世は、建物や土坑を検出した。
- ・ 調査地の南側で近世以降の溝を検出した。



調査地遠景 (北から)

遺跡は、加賀市南部の丘陵地帯から流れる動橋川と大聖寺川によって形成された沖積平野に立地している。

発掘調査は、一般県道片山津山代線のバイパス工事に伴うもので、同事業では加茂新高遺跡、加茂キツネ塚遺跡、国道8号改築（加賀拡幅）では加茂フルドウ遺跡が、新たに発見されており、また本遺跡の西側では詳細不明ながらも中代B遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として知られている。

調査地は南北方向に長さ235m、幅16mほどあり、東西は水田と大豆畠によって挟まれている。包含層は過去の耕地整理によってほぼ削平されている状況であり、全体的に遺物の出土は多くなかった。遺構は中央部を除き北側と南側で多くみられ、北側では弥生時代終末期～古墳時代前期頃、古代、中世の各時期の集落跡を確認した。弥生時代から古代までは主に土坑や溝などを検出し、奈良時代は小穴から須恵器杯、土師器甕、布目瓦が出土している。弥生時代から奈良時代の集落の中心は、地形から判断して調査区西側にあるものとみられる。中世は数棟の総柱建物、井戸または水溜とみられる土坑、堅穴状土坑などで構成される集落を確認した。

調査地南側では、南北方向や東西方向にしっかりと深く掘られた数条の溝を検出した。溝の近くには、調査区域に隣接して殿様生水と呼ばれる湧水があり、近世の頃から利用されていたことが文献により確認できる。溝のいくつかは、この湧水に向けてのびている。これらの溝からは、遺物が出土しないため時期の比定は困難であるが、覆土の観察等から近世以降のものと考えられる。

今年度も引き続き実施される調査で、これらの溝について時期が判明することを期待したい。

(立原秀明)



加茂ボケ生水ウラ遺跡全体図

# 平成 26 年度下半期の出土品整理作業

## 国関係調査グループ

下半期は上半期で報告済みの金沢城跡（金沢市 平成 25 年度調査）の続き、北吉田ノシロタ遺跡（羽咋郡志賀町 平成 26 年度調査）、一針 C 遺跡（小松市平成 26 年度調査）の整理を行った。北吉田ノシロタ遺跡と一針 C 遺跡は、県関係調査グループとともに整理作業を行っており、北吉田ノシロタ遺跡に関しては、県関係調査グループの作業報告をご覧いただきたい。

一針 C 遺跡は、弥生時代から中世の集落遺跡である。今年度の整理では、平成 26 年度調査分の中から、SD116 以外の土器や陶磁器等の記名・分類・接合と実測を行った。記名・分類・接合の作業では、土器類の摩耗が著しく、もろいため接合しにくかった。実測中も補強したにもかかわらず壊れるものが多く、調整も判別しにくいものが多くあった。実測した遺物は、甕・壺・高坏・器台・鉢・支脚やミニチュア土器等の弥生土器、古墳時代～古代の坏・蓋・高坏・甕・提瓶等の須恵器、皿・甕・甑等の土師器、中世の土師皿・越前焼・珠洲焼・瀬戸美濃等の陶磁器類がある。他にも、フイゴの羽口や土錘、土玉、円盤状土製品等と多種多様である。石器、木製品、金属器も多く出土しているが、SD116 の土器類とともに来年度以降整理の予定である。

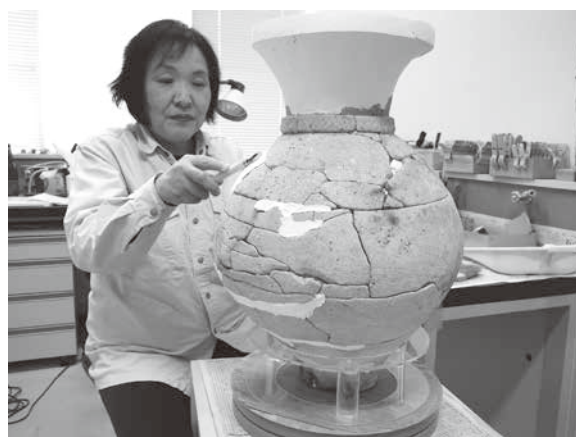
（横山そのみ）



土器の選別（一針 C 遺跡）



土器の接合（一針 C 遺跡）



大型壺の復元（一針 C 遺跡）



大型壺の実測（一針 C 遺跡）

## 県関係調査グループ

下半期は、加茂新高遺跡（加賀市 平成 25 年度調査）、古府タブノキダ遺跡（七尾市 平成 25 年度調査）、加茂ボケ生水ウラ遺跡（加賀市 平成 26 年度調査）、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町 平成 26 年度調査）、一針 C 遺跡（小松市 平成 26 年度調査）の整理作業を行った。

加茂新高遺跡では、上半期に続いて実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。

古府タブノキダ遺跡では、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。遺物は須恵器（坏）が多く、石鏃等もみられた。

加茂ボケ生水ウラ遺跡では、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。土器の多くが摩耗しており、調整の観察に苦労した。

加茂新高遺跡、古府タブノキダ遺跡、加茂ボケ生水ウラ遺跡の 3 遺跡は 2 人体制での作業に加え、整理期間も短かったためテンポよく作業が進むように気を配った。

北吉田ノシロタ遺跡では、国関係調査グループと合同で記名・分類・接合作業を行った。この遺跡の土器類は大半が脆くなっていたため、接合したそばから外れていってしまうものが多く、付け直しの繰り返しで手を焼いた。また、土器片が多い割には、口縁部・底部等と部分々々でしか形にならず、想像していたより大きくなるものが少なかった。

一針 C 遺跡は、国関係調査グループと合同で整理作業を行った。整理作業についての詳細は国関係調査グループの報告をご覧ください。（澤山彬）

遺物洗浄は、一針 C 遺跡・矢田新遺跡（ともに小松市）、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町）など平成 26 年度下半期に発掘調査を実施した遺跡の出土品について実施した。（松山和彦）



石器の実測（古府タブノキダ遺跡）



平瓦の実測（加茂ボケ生水ウラ遺跡）



土器の接合（北吉田ノシロタ遺跡）



土器の選別（北吉田ノシロタ遺跡）

## 特定事業グループ

下半期は、古府・国分遺跡（七尾市 平成24年・25年度調査）、徳光聖興寺遺跡ほか1遺跡（白山市 平成25年度調査）、金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市 平成26年度調査）、七尾城跡（七尾市 平成24年・25年度調査）金沢城跡（金沢市 平成25年度調査）の整理を行った。

上半期より引き続き、古府・国分遺跡では、遺構図トレースを行った。

徳光聖興寺遺跡ほか1遺跡では、土器、石器の記名・分類・接合、実測、トレースを行った。土錘が多く出土していた。

金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）では、今年度調査を行った遺物の記名・分類・接合、実測、トレースを行った。昨年度から整理を行っているため、越前の大甕の蔵骨器の接合は、手際よく出来た。私は大甕の実測は初めてで、1/2で縮小しながら実測するのも初めてだったので、頭が混乱しそうだったが、なんとか実測することができた。

七尾城跡では、土器、木器、金属器の記名・分類・接合、実測、トレースを行った。

土師皿が多く出土しているが、越前の大甕の破片が多く出土していた。

金沢城跡では、上半期に国関係グループが行った整理作業の続きで、瓦、陶磁器、土製品等の分類・接合、実測までを行った。

(土生久美子)



越前蔵骨器の接合（金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区））



記名・分類・接合（徳光聖興寺遺跡他1遺跡）



分類・接合（金沢城跡）



木器の実測（七尾城跡）

# 方形横板組隅柱留め井戸の構造について

## —古府・国分遺跡と大御堂廃寺出土井戸の比較—

久田 正弘

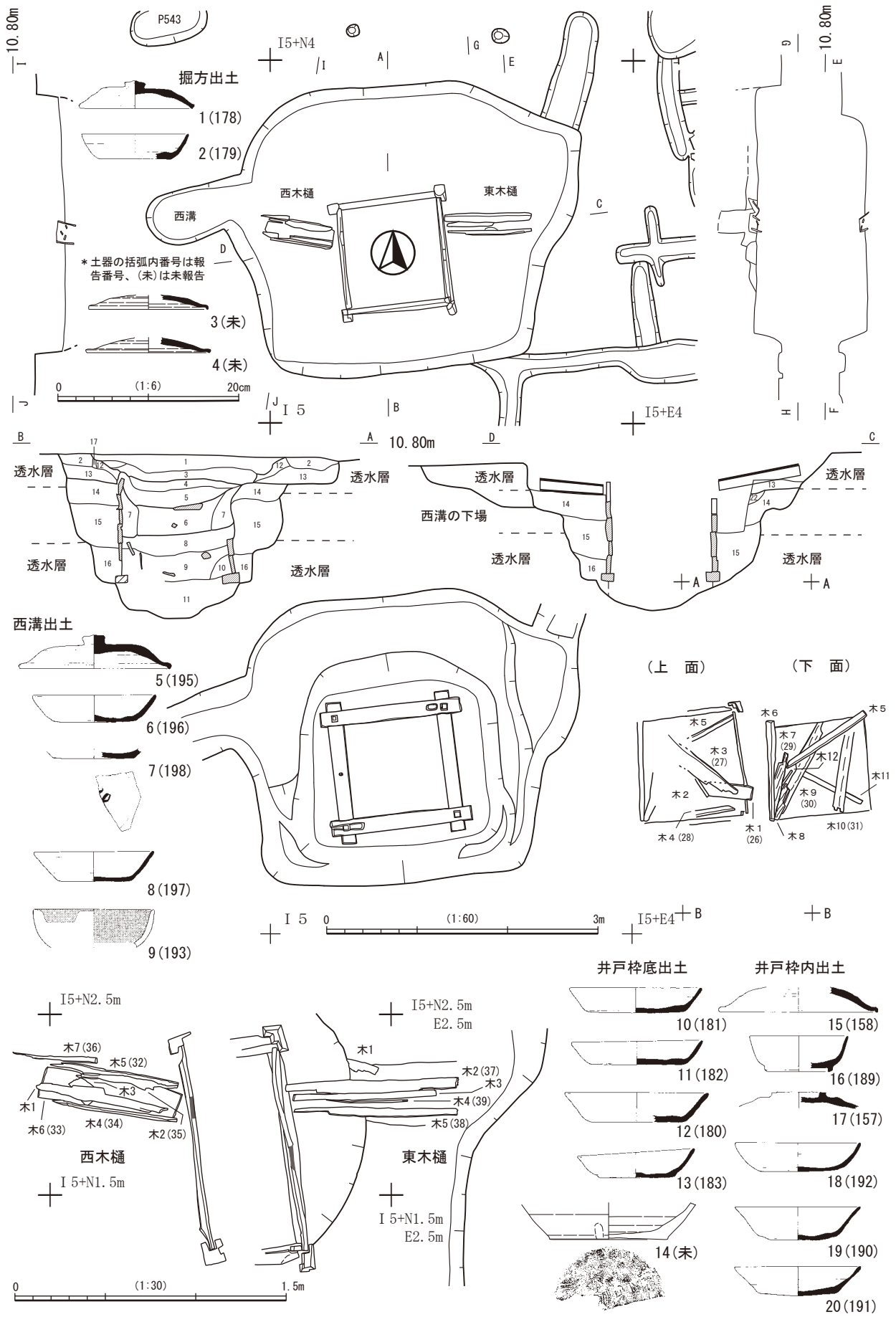
### 1 はじめに

筆者は平成4年津幡町加茂遺跡 SE02 を調査し、石川県内古代遺跡出土の横板組井戸をまとめたことがある(久田1993)。平成17年七尾市古府・国分遺跡で横板組井戸(B区 SE02)を調査した際に、まとめた資料とは構造が異なり、鳥取県倉吉市大御堂廃寺 SE01(方形横板組隅柱留め、根玲ほか2001)と同じ構造であるとの指摘を受けた。その後、平成22年度の整理作業以外を筆者が担当したが、調査・整理・報告書作成時において多くの問題点を確認し、筆者などの力量不足を痛感した。平成27年3月に報告書(久田・和田2015)を刊行したが、頁・時間などの関係から全体図・遺物観察表は全てデータ(CD)で報告するしかなく、井戸の考察も行えなかったため、報告内容の一部訂正を含めて井戸の構造を中心に紹介したい。

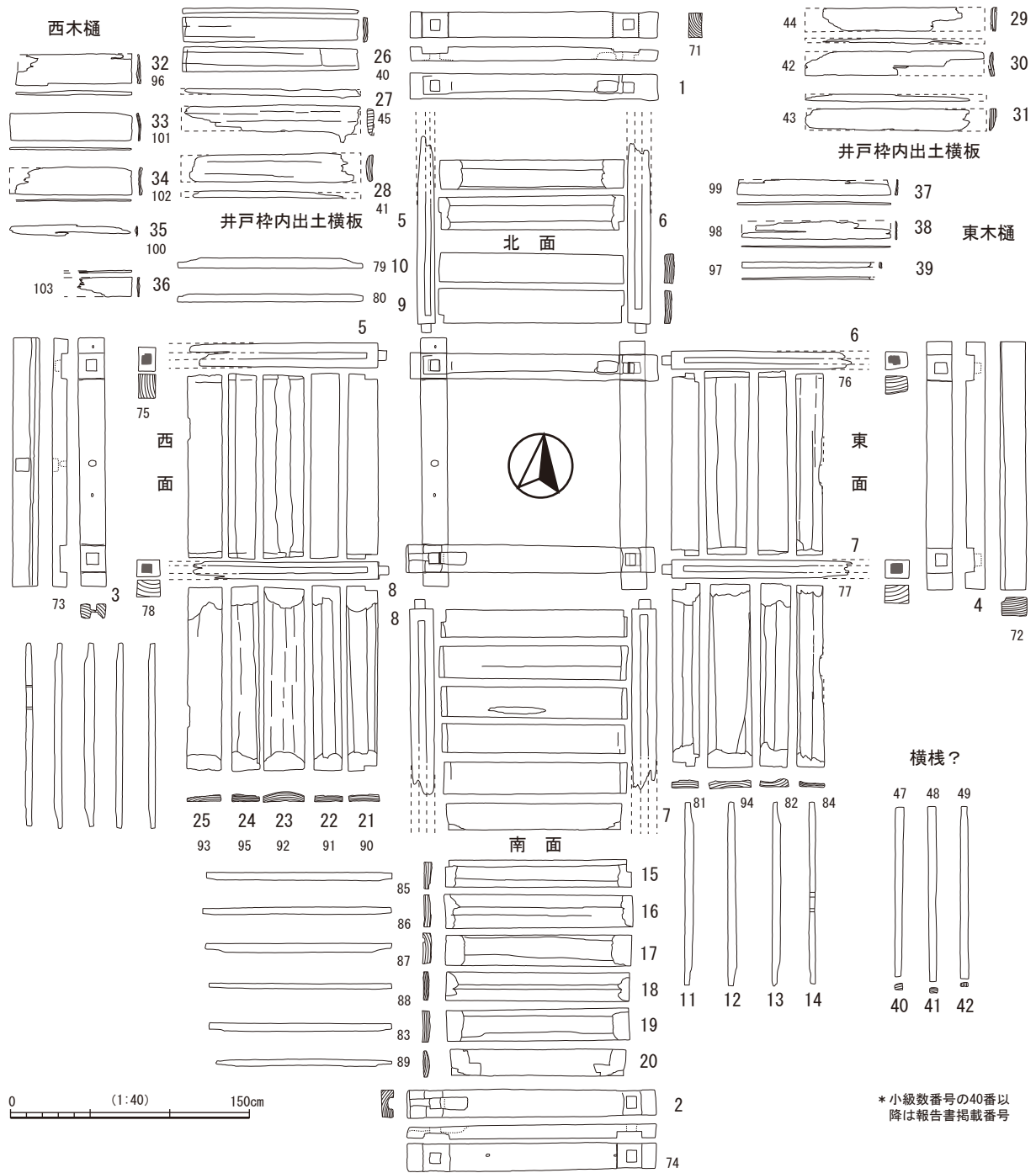
### 2 古府・国分遺跡の井戸

古府・国分遺跡は史跡能登国分寺跡の北側に位置し、平成17～26年度七尾バイパスに伴い石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。平成17年度B区 SE02はI4～I5区に位置し、史跡能登国分寺跡北側推定ラインの北約一町付近に位置する。構築時期は第1図1・2から北陸古代V期(田嶋1988、9世紀前半：年代観は伊藤ほか2005)の可能性も指摘されているが、未実測・未報告であった第1図3・4などから構築時期は北陸古代VI1期(9世紀中葉)であり、廃棄時期は井戸枠内出土遺物(第1図10～20)から古代VI2期(9世紀末)である。これは、能登国分寺II期(定額寺・太興寺が国分寺に昇格843年～天災により堂舎が倒壊するまで882年、北林2012)に相当すると思われる。井戸の掘り方(第1図、写真2)は、ややいびつな隅円方形(3.1×2.9～3.7m)で、深さ1.8mである。構造は大きく5段構成であり、1段目は素掘りの水溜、2段目は方形の基礎(写真3・4)、3段目は横板組隅柱留め井戸側、4段目は木樋(写真5～7)、5段目は地上部の井桁部分であり、第2図40～42が横棧の可能性もある。

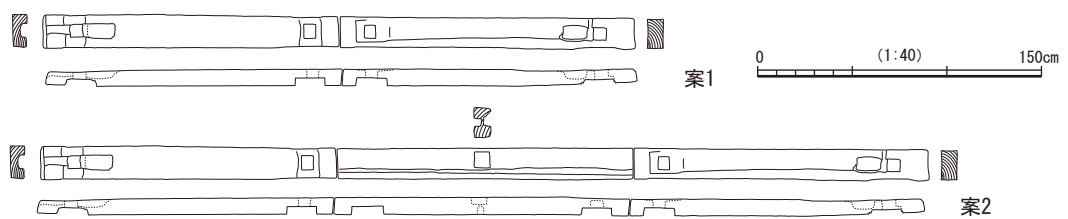
井戸側は遺構検出面から深さ10cmで確認され、井戸側内寸は、東西104cm(約35寸：平安京造営時の尺29.8cm)南北1.08m(約36寸)であり、検出面から1.3～1.35mに方形の基礎がある。井戸側の基礎材(第2図1～4)は、東(4：1648×161×124mm)と西(3：1567×172×90mm)の角材を南北方向(写真3)に据え、北(1：1558×168×90mm)と南(2：1568×178×85mm)を東西方向に組み合わせ、主軸方位はN6・7°Wである。1・2の隅円方形窪み(写真4)はやや荒れていることから、転用前の痕跡と判断した。これは扉の軸受け(第4図右)の痕跡と思われる、1の東側と2の東・西側はやや痩せているが、幅と厚さもほぼ同じ事から同じ蹴放しを2分割したもの(第3図案1)と判断した。復元される扉幅は262cm約88寸であり、ホゾ穴と扉軸受けの間が狭いことから小脇板は無かったと報告したが、ホゾ穴は転用時に加工されたので、1の右側・2の左側は少しカットされた(小脇板は存在した)と判断した方が良いであろう。しかし、西基礎(第2図3)の幅は第2図1・2とは4・6mmとあまり差はなく、厚さは同じと5mm差しか無いことから、横架材(桁・梁など)を転用した可能性(筆者提示、山田・林氏同調)も否定出来ない(第3図案2)。そうであるなら、第2図1・2の窪みは横架材では何に当たるのであろうか。また、2裏面・3表裏面には転用前の痕



第1図 古府・国分遺跡B区SE02実測図



第2図 SE02の部材



第3図 方形基礎の関係

表1 井戸出土土器

番号	報告番号	実測番号	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	焼成	備考
1	178	D124	掘方下層	須	杯蓋	12.8		3.1	良	歪み大
2	179	D581	掘方中・下層	須	無台杯	11.8	7.8	2.8	良	
3	未	追加2	南掘方	須	杯蓋	13.5		1.7	良	上から2段目まで
4	未	追加3	西掘方中層	須	杯蓋	13.1		1.6	良	転用硯
5	195	D125	西溝縦SB、P2	須	杯蓋	16.8		3.7	良	
6	196	D171	西突出部No.1	須	無台杯	13.6	9.2	3.0	良	
7	198	D174	西木樋No.4	須	無台杯		8.9	1.1	良	底面に墨書。
8	197	D26	西突出部NO. 2	須	無台杯	13.8	8.2	3.3	良	
9	193	D119	西溝SB中央	土	椀	13.3		4.2	良	内黒。外面赤彩か
10	181	D118	底	須	無台杯	15.6	11.0	2.8	不良	
11	182	D117	底	須	無台杯	14.4	10.8	2.7	良	
12	180	D116	底	須	無台杯	15.8	11.0	3.3	良	内面に使用痕少し
13	183	D114	底	須	無台杯	12.9	8.2	3.2	良	歪み大
14	未	追加1	井戸枠内	土	鉢		13.0	4.1	良	内外面スス付着
15	188	D580	井戸枠内上層	須	杯蓋	17.5		2.7	良	
16	189	D122	井戸枠内上層	須	有台杯	10.8	7.4	3.9	良	
17	187	D121	井戸枠内	須	杯蓋			1.8	良	
18	192	D120	井戸枠内上層	須	無台杯	13.8	8.6	3.1	不良	
19	190	D112	井戸枠内	須	無台杯	13.8	6.9	3.7	良	
20	191	D123	井戸枠内	須	無台杯	13.9	8.4	3.2	良	

表2 井戸部材観察表

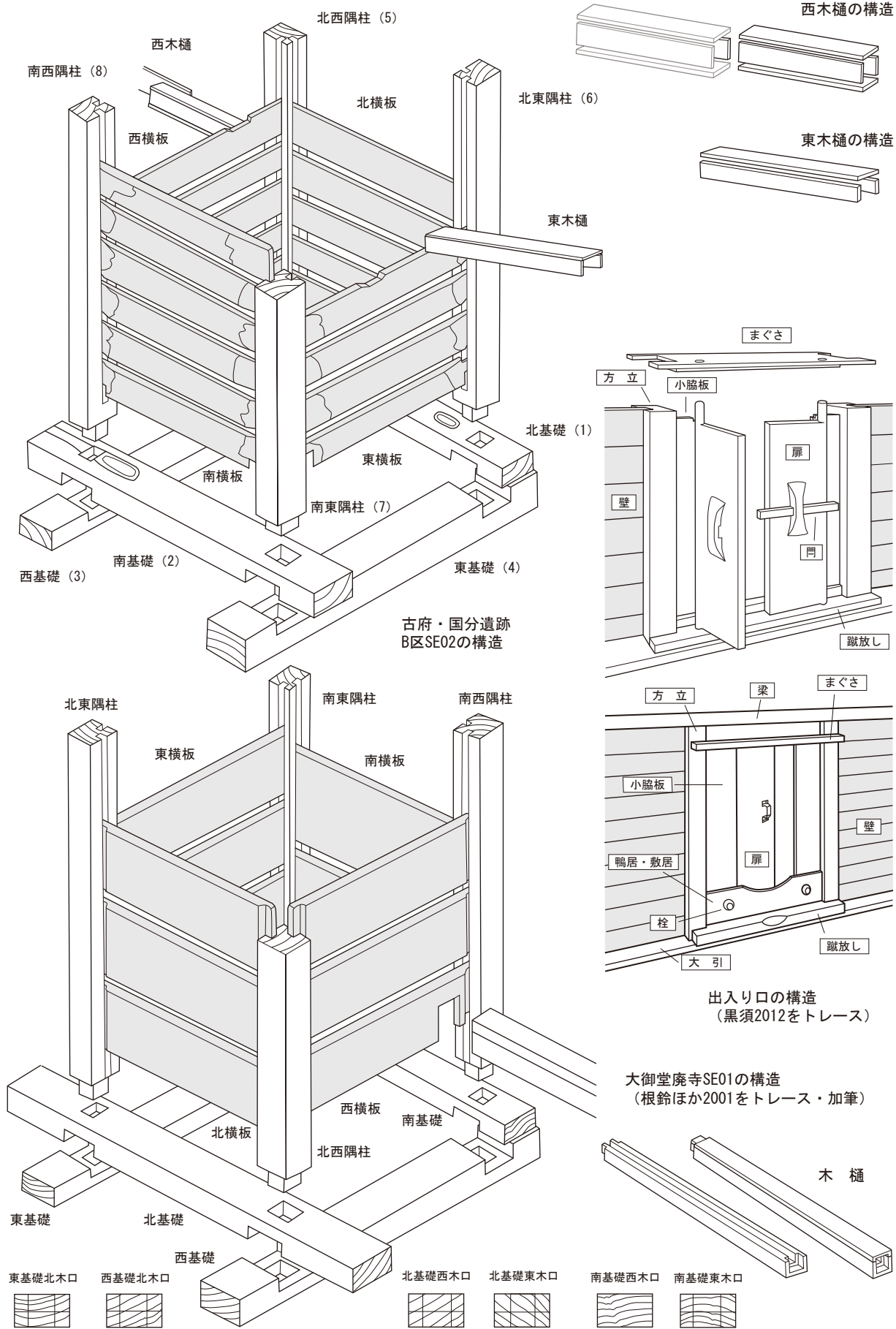
番号	報告番号	実測番号	部位名	報告書名	器種	最大長	最大幅	最大厚	備考(単位はmm、39以外は全てスギ)
1	71	131	北基礎	北基礎	基礎材	1558	168	90	西側ホゾ穴幅60×69、深さ38~45mm、東側ホゾ穴幅70×66mm、深さ50~52mm
2	74	132	南基礎	南基礎	基礎材	1568	178	85	東側ホゾ穴：63×74深さ43~45、仕口幅158深さ40。西側ホゾ穴：63×66深さ35~40仕口幅154深さ32~45。東側隅柱圧痕幅108~120、西側隅柱圧痕幅107~116。
3	73	52	西基礎	西基礎	基礎材	1567	172	90	北側ホゾ穴：71×65深さ36、仕口幅163~167×32~39。南側ホゾ穴：72~76×76深さ33、仕口幅171~177×154~155深さ42。楕円ホゾ40×46深さ45。方形ホゾ：80~84×81~85深さ38
4	72	53	東基礎	東基礎	基礎材	1648	161	124	北側ホゾ穴：69×74深さ42~45、仕口幅161~170×155深さ48~52。南側ホゾ穴：75~78×71深さ45、仕口幅153~158×157深さ43~55。
5	75	116	北西隅柱	北西隅柱	隅柱	(1240)	157	113	出ホゾ：62×56長さ56。溝：南溝幅38深さ47、東溝幅38深さ50。
6	76	117	北東隅柱	北東隅柱	隅柱	(1194)	156	114	出ホゾ：40~55×70長さ56~66。溝：南溝幅29~36深さ37~47、西溝幅40~47、深さ35~52。
7	77	118	南東隅柱	南東隅柱	隅柱	(1195)	158	115	出ホゾ：72×58長さ60。溝：北溝幅40深さ38~40、西溝幅34深さ43~47。
8	78	115	南西隅柱	南西隅柱	隅柱	(1161)	155	114	出ホゾ：63×54長さ61。溝：北溝幅38~44深さ31~43、西溝幅35~42深さ35~39
9	80	65	北1段目	北側板1	横板	1168	220	51	
10	79	56	北2段目	北側板2	横板	1163	185	65	
11	81	59	東1段目	東側板3下	横板	1150	173	56	
12	94	66	東2段目	東側板3	横板	1155	282	48	
13	82	104	東3段目	東側板2	横板	1159	194	52	
14	84	81	東4段目	東側板1	横板	1144	176	41	
15	85	85	南1段目	南側板5	横板	1168	174	47	
16	86	110	南2段目	南側板4	横板	1187	216	42	
17	87	108	南3段目	南側板3	横板	1172	197	58	
18	88	79	南4段目	南側板2	横板	1148	181	38	
19	83	72	南5段目	東2	横板	1156	203	53	
20	89	112	南6段目	南側板1	横板	1103	171	40	
21	90	114	西1段目	西側板6	横板	1163	199	44	
22	91	55	西2段目	西側板5	横板	1166	178	40	
23	92	256	西3段目	西側板4	横板	1158	256	67	
24	95	109	西4段目	西側板3	横板	1171	174	45	
25	93	107	西5段目	西側板1	横板	1150	214	46	
26	40	58	横板1	木1	横板	1107	158	37	風蝕、腐食著しい
27	45	83	横板3	木3	横板	(1104)	172	46	
28	41	68	横板4	木4	横板	(1032)	181	46	
29	44	78	横板7	木7	横板	(876)	151	38	
30	42	71	横板9	木9	横板	(1126)	162	36	
31	43	57	横板10	木10	横板	(1032)	138	43	
32	96	123	北側板	西木樋5	横板	728	195	25	
33	101	77	底板	西木樋6	木樋	770	183	27	
34	102	84	南側板	西木樋4	木樋	737	179	20	
35	100	73	蓋板	西木樋1	木樋	(762)	(72)	(19)	
36	103	229	北側板2	西木樋7	木樋	(343)	124	15	
37	99	60	北側板	東木樋2	木樋	964	101	17	
38	98	75	南側板	東木樋	木樋	935	118	12	
39	97	61	蓋板	東木樋3	木樋	(809)	39	29	ヒノキ科(アスナロか)
40	47	70	横棧?	底	横棧?	1068	47	43	
41	48	69	横棧?	底	横棧?	1102	55	38	
42	49	101	横棧?	底	横棧?	1083	54	28	

跡が残っている。基礎材は仕口加工により、井桁状に組み合わせ（写真3）、合わせ目の中心に方形のホゾ穴（60～74mm）を作り出し、隅柱を据えている。ホゾ穴は合わせた際に隙間が出来た為に、北東・南西のホゾ穴には薄い板材（未報告、第2図黒塗り）が詰められていた（写真4）。基礎材のホゾ穴は貫通していないが、南西側のホゾ穴は薄いために一部壊れていた。

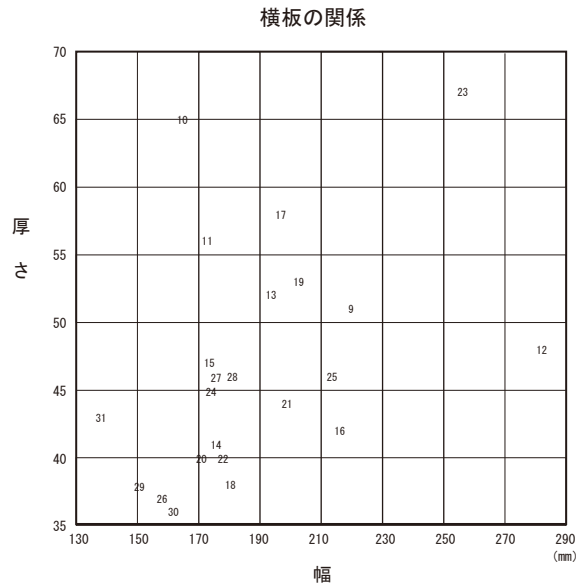
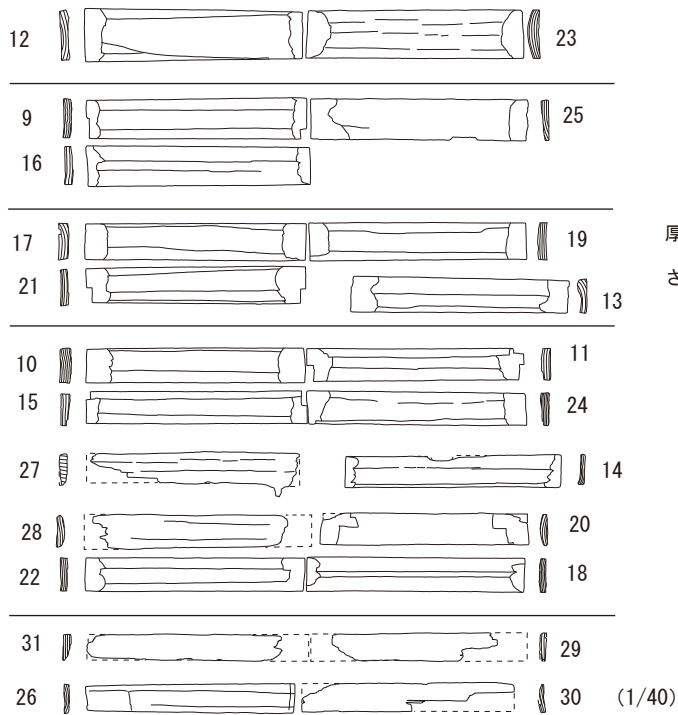
井戸側は隅柱（5～8）と横板（9～25）からなり、横板は合わせ目がしっかり（写真8・9）している。隅柱の中心距離は、北面と南面は124cm、東面120cm、西面122cmであり、その内側に110～117cmの横板を据えている。隅柱は角材（幅155～158×113～115mm）の先端を方形の出柄にしており、北東・北西隅柱（5・6）の先端一部は鍵状である。隅柱の幅は、5北西隅柱南面（幅157mm）・東面（幅113mm）、6北東隅柱西面（幅156mm）・南面（幅114mm）、7南東隅柱北面（幅115mm）・西面（幅158mm）、8南西隅柱東面（幅155mm）・北面（幅114mm）であり、ほぼ同じ規格である。隅柱は長軸面の外側に芯を向けている。隅柱の横2面に掘り込まれている横板の落とし溝は、基礎と合わさる面から上7～9cmから始まるが、5北西隅柱東面は上5cm、7南東隅柱西面は上4cmから始まる。隅柱は2面に横板を落とし込む構造であり、方立（第4図右）の横面に新たな溝を彫ったものと判断し、5東面と6南面（短軸方向）、7北面と8北面（短軸方向）が同じ方立の組み合わせと思われる。

井戸側板はすべて横板であり、北面2枚（9・10）・東面4枚（11～14）・南面6枚（15～20）・西面5面（21～25）が残っており、井戸枠内からは6枚（26～31）が出土した。下から1段目（9・11・15・21）は下側両隅を鍵状にカットしているが、21以外は両側の切り込みの深さが大きく異なり、11には北側上にも切り込みを持つ。横板は、27（柾目材）以外は年輪に沿って剥いだ板目材を使用し、井戸枠内側には13以外（14は要検討）は芯側を向けている。横板は落とし溝より厚い板を使用しているため、内側は両端を少し調整しているが、外側は両端を大きく削っている。横板は厚さから壁材・床材を転用したのであろう。井戸側の横板の幅と厚さの関係をみてみたい（第5図）。幅と厚さは、共に増やすことは不可能であるが、減らす事は容易である。よって、幅を中心にしてグループ化してみよう。23・12は250mm以上であり、他とは大きく異なる。12の厚さは23より20mmほど少ないが、外側の凸面を剥いだと考えればあまり差が無い。幅210～230mmには9・25・16があり、厚さは9mm差があるが3点は関連が想定されよう。幅190～210mmには、17・19・13・21があるが13は芯側を外側に向けているので、グループから外れるようだ。170前後～190mmには10・11・15・26・27・24・14・20・22・18がある。27は柾目材であり、14は芯を外側に向けている可能性があり、他とは異なる。幅と厚さと木取りから、10・11・15・24のグループと28・20・22・18のグループに分けることが出来るであろう。幅170mm以下では、31・29、26・30が近い関係が伺える。これらから、横板には幅・厚さ・木取りの関係から、関連性が伺え、同一材（床板・壁板）を分割した可能性がある。井戸枠内から、第2図40～42（42は報告書49の75%が1/10）が出土していることから、井戸枠内に横棧が存在した可能性が想定される。横棧と思われる部材は地上部に存在していたものが、廃棄時に井戸枠内に落ちたのであろうか（写真1）。

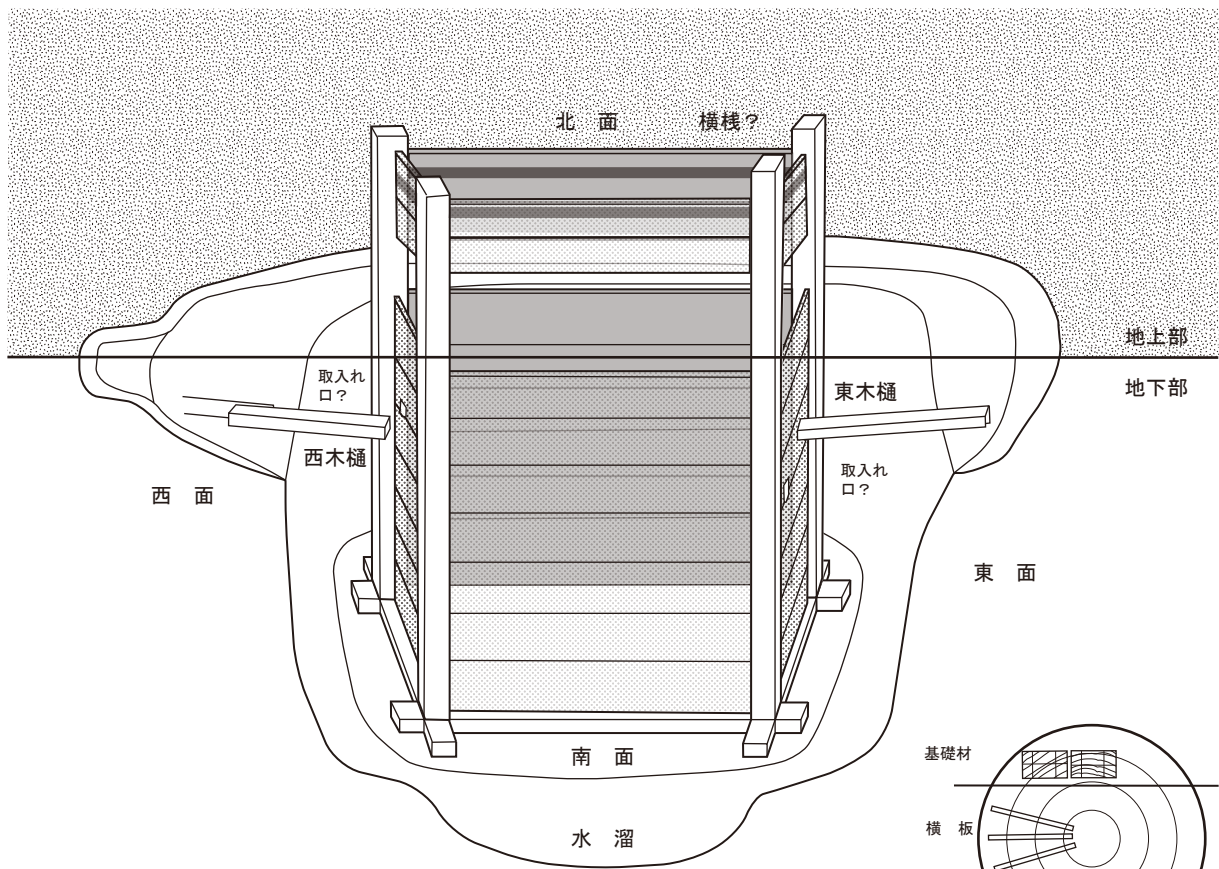
第4段目には、東西に2つの木樋が確認された。両木樋とも、上層の透水層（砂質土）中に築かれており、井戸側に給水する為の施設と思われる。調査中に1晩、水中ポンプの電源を切って置くと、ほぼ木樋付近まで冠水していた（写真10）。西木樋は北西隅柱から南に20cmの位置にあり、西側はやや北側に振れて西溝に続く。西木樋（32～35）は底板（33）の南北端に側板（32・34）を立て、蓋板（第1図木1～3、木1のみ報告：報告書第108図100）が組まれていたようである。西木樋（推定長77cm幅20cm高さ11cm）は、井戸枠内側まで7cm空いている。底板の西端は標高10.25m、東端は10.21mであり、4cm井戸側に傾斜している。西木樋東端は、西側板5段目（25）の切り込み（標高10.34m幅14cm深さ3cm、第1図黒塗り）より13cm低く（写真6）、4段目上面（24）よりは6cm高い位置



第4図 井戸側の構造比較



第5図 横板の関係



第6図 SE02の復元イメージ

第7図 SE01部材の割り付けイメージ

(写真7)である。東木樋(写真5)は、北東隅柱から南に20cmの位置にあり、東側が若干南に向く。長さ96cm幅17cmと思われ、5枚の板があり、2枚の側板(36・37)と天板(木3・4、未報告)と思われた。36の下場は東側10.42m西側10.30mであり、12cm下がっている。東側板4段目(14)は中央よりやや右側に切り込み(幅16cm深さ2cm)があるが、木樋の西側と切り込みの西側は30cmの間隔(写真5)がある。切り込みの標高は10.16mであり、東木樋西端より14cm低い。よって、東西の木樋と東西の側板の仕口は一見関連がありそうだが、標高や位置は大きくずれている。この誤差を、出土遺物の時間差(作り変え)などからは説明は難しい。

### 3 井戸の特徴

古府・国分遺跡B区SE02の構造上の特徴は、

特徴1：基礎材は、同一(東西)方向を設置した後に直角(南北)方向を組み合わせる。

特徴2：下側の基礎材は芯側を下に向け、上側の基礎材は芯側を上に向ける。

特徴3：長方形の隅柱は、長軸外側(溝を持たない)面を木の芯側に向ける。

特徴4：横板は、板目材を使用(23点中22点、27は柵目材)。

特徴5：横板は、井戸枠内側に材の芯側に向ける(17点中15点)。

特徴6：横板の内側は、平坦面(部材の主要面)、外側は凸面(部材の非主要面)に向ける。

特徴7：基礎材・隅柱は、蹴放し・方立を転用した可能性。

特徴8：横板は、床材・壁材を転用・分割した可能性。

などがあげられる。

では県内の類例はどであろうか。金沢市畝田西遺跡群E区SE04(和田ほか2006)では、特徴4・5が確認されるが、隅柱は多角形の柱を転用している。金沢市戸水C遺跡SE08では、特徴8が確認(横板組2段目の4枚は接合:約2間約3.55m)され、壁材の可能性が指摘(北野ほか1993)されている。

では鳥取県倉吉市大御堂廃寺SE01(第4図下、根玲ほか2001)はどうであろうか。内寸東西0.99×南北1.14m、高さ0.92cmが残っており、主軸方位はN12°Wである。構築時期は、7世紀後半～8世紀前半であり、井戸枠内からは8世紀前半の須恵器が主に出土したようである。隅柱・基礎材・横板には、一部に番付と墨付けが残っているが、番付方位と設置方位では90°左回りにずれている。

基礎材は、東西方向を設置した後に、南北方向を組み合わせる(特徴1)。基礎材は芯側を上側に向けるが、南基礎だけは芯側を下側に向ける。基礎材は、幅15～17cm・厚さ9cm前後であり、木口面には墨付けが確認される。北基礎(長さ170cm)以外は、長さが158～161cmであり、片方にしか墨付けが無いことから設置の際に片方を切り落としている。よって木口面の墨付けは、原材料から分割する際の基準として施されたと思われる。木取りは、南・東基礎と北・西基礎が近いことを確認した(第4図下端)。

隅柱は1辺約13cmの正方形であり、北東・北西隅柱は柵目材に近い木取りであり、芯側とその右側に溝を持つ。南東・南西隅柱はほぼ直角に近い板目材であり、芯側を外して溝を持つ。横板は、西1段目の南西下側を鍵型にカットしているが、他の面では加工は認められないようだ。横板は、復元展示されているので厚さや木取りは詳細に観察することは不可能であったが、全て柵目材と思われるが幅と厚さはバラつきがある。柵目材とすれば、原材料から放射状に分割した可能性がある。

大御堂廃寺SE01は、番付・墨付けから設置場所以外で部材が製作された可能性が高い。基礎材は原材料(長さ170cm程度)の木口面に墨付けして、分割・成形したようである。隅柱も同じように、原材料の木口面に正方形(13cm強)の墨付けをして、分割・成形したと思われる。横板は丸太材から放射状に分割した材を利用した可能性が高いと思われる(第7図)。



写真1 井戸枠内下面出土状況（北から）



写真2 井戸枠全景（北から）



写真3 基礎材出土状況（東から）

写真4 基礎材組み合わせ状況

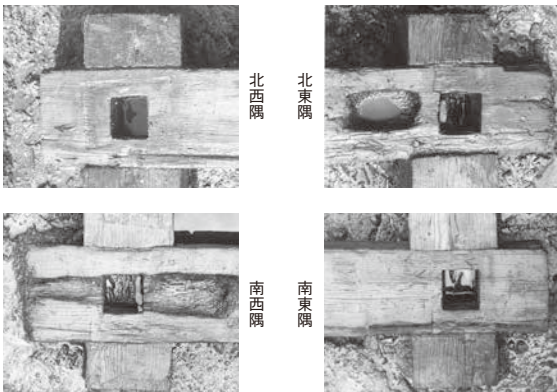


写真5 東木桶出土状況（西から）



写真6 西木桶出土状況（東から）



写真7 西木桶取り付け状況（北西から）



写真8 南東隅柱合わせ目（北西から）



写真9 南東隅柱外側（南西から）

#### 4 まとめにかえて

同じ構造と思われた古府・国分遺跡 B 区 SE02（9 世紀中葉）と大御堂廃寺 SE01（7 世紀後半～8 世紀前半）は、特徴 1 以外は一致しなかった。部材の観察などから、古府・国分遺跡 B 区 SE02 は建築部材（方立・蹴放し・壁板・床板）を転用し、大御堂廃寺 SE01 は原材料から新規に製作したものと判断できよう。古府・国分遺跡 B 区 SE02 の報告にあたり、部材が大きくて水漬け状態であることから、接合関係などを把握出来なかった。接合関係などの把握は、現場か実測作業中に確認するのがベストと思われるが、時間不足や認識不足により行われなことが多いため現状であり、反省すべき点である。大御堂廃寺 SE01 の部材は、保存処理後に倉吉市博物館で展示されており、数年前に展示を見た時には気が付かなかった点があるが、今回新たな視点をもとに構造を観察させて頂いたことで、古府・国分遺跡との違いを確認することが出来た。筆者は情報不足のために、方形横板組隅柱留め井戸の類例を知らないが、今後類例が増えた際には本稿の視点が少しでも参考になれば幸いである。本稿をまとめるにあたり、多くの方々の協力を得た。氏名を記して感謝としたい。敬称省略。河合章行・北 寿栄・久保穰二郎・小林多恵子・小林直子・林 大智・根鈴輝雄・村上泰子・山田昌久・和田龍介、倉吉市教育委員会・倉吉市博物館。

#### 参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』 海青社  
伊藤雅文ほか 2005 『畝田東遺跡群Ⅱ』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
北野博司ほか 1993 『戸水 C 遺跡—平成 2・3 年度』 石川県立埋蔵文化財センター  
北林正康 2012 『史跡能登国分寺跡発掘調査報告書—平成 19 年度～23 年度の範囲確認調査』 七尾市教育委員会  
黒須亜希子 2012 「日本列島出土木製品分類表「参考図」」『木の考古学』 海青社  
田嶋明人 1988 「古代編年軸の設定」『北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会  
根鈴輝雄ほか 2001 『史跡大御堂廃寺発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会  
久田正弘 1993 「石川県内の古代横板組井戸の概要」『加茂遺跡—第 1 次・2 次調査の概要』 (社)石川県埋蔵文化財保存協会  
久田正弘・和田龍介 2015 『古府・国分遺跡Ⅰ』 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
和田龍介ほか 2006 『畝田西遺跡群Ⅴ』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター



写真 10 SE02 冠水状況（北東から）



写真 11 隅柱と横板の関係（東から）

# 素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について

川畑 誠

## 1. はじめに

大宝元年（701）制定の大宝律令は、中央集権的な行政機構として国・郡・里（郷）制を定めた。各国には、中央から派遣される国司（守）が政務・儀式・饗宴等を行う「国庁（政庁）」と、国庁を中心として税の徴収や物資の管理・出納等の行政実務を執行する諸施設（曹司・正倉等）や国司の館等の「国衙」が置かれることとなる。一般に国府とは、この国庁、国衙、さらに役人の居住域等を含む一定の空間を指す場合が多い。また、国府内あるいは周辺地には、駅家・津等の交通施設、国分寺・国分尼寺・総社等の宗教施設、軍団等の軍事施設が、さらに各郡には郡家の諸施設（郡庁・館・正倉等）が、それぞれ配される。

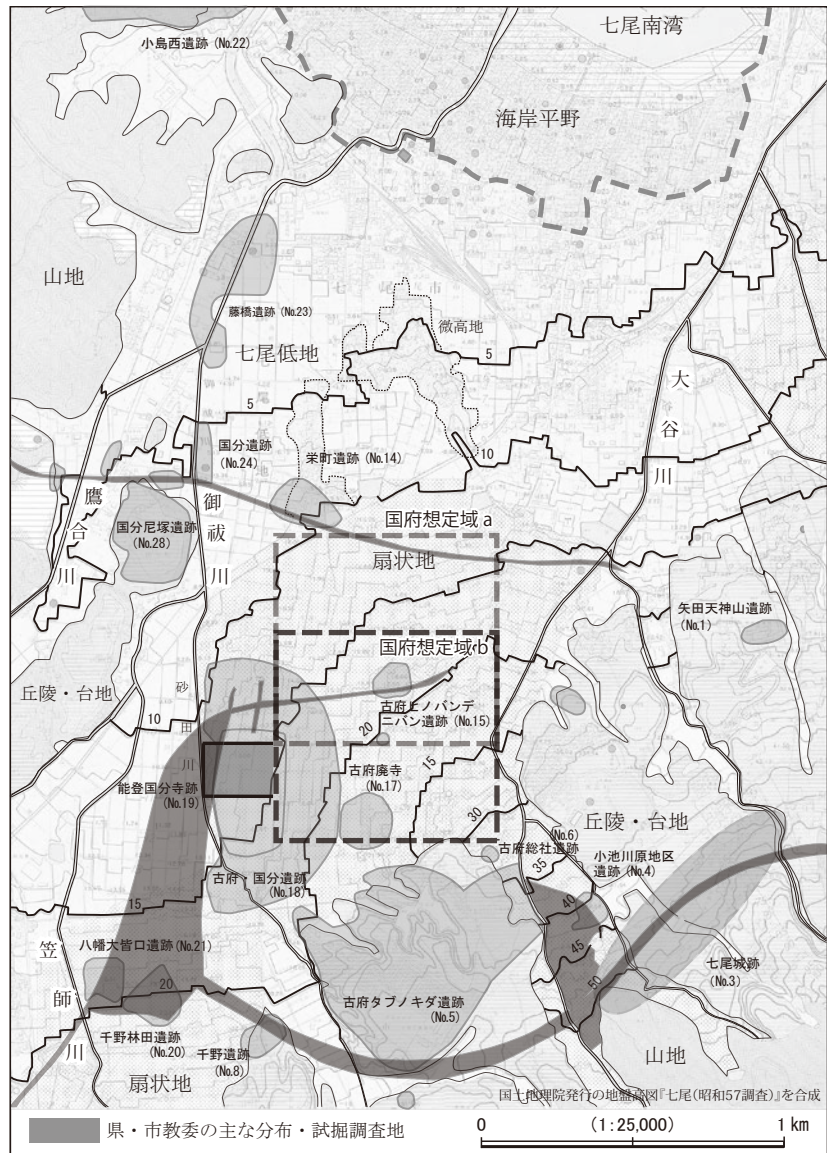
古代能登国は、養老2年（718）3月に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を割いて立国（第1次立国）したものの、天平13年（741）12月に廃され越中国に併合、天平勝宝9年（757）に再び分立する（第2次立国）という経緯をもつ。2度にわたる能登立国に伴う統治機構の改編・整備は、能登国府が所在した七尾地域の集落遺跡<sup>(1)</sup>の動向にも大きな影響を及ぼしたことは想像に難くない。

以下では、近年一定の進展をみた発掘調査成果を加味しつつ、同地域の集落遺跡の動向を概観するとともに、七尾市栄町遺跡の位置付け<sup>(2)</sup>を検討する中で感じた古代律令期の能登国の政治中枢域である国府所在地についても若干の言及を行いたい。

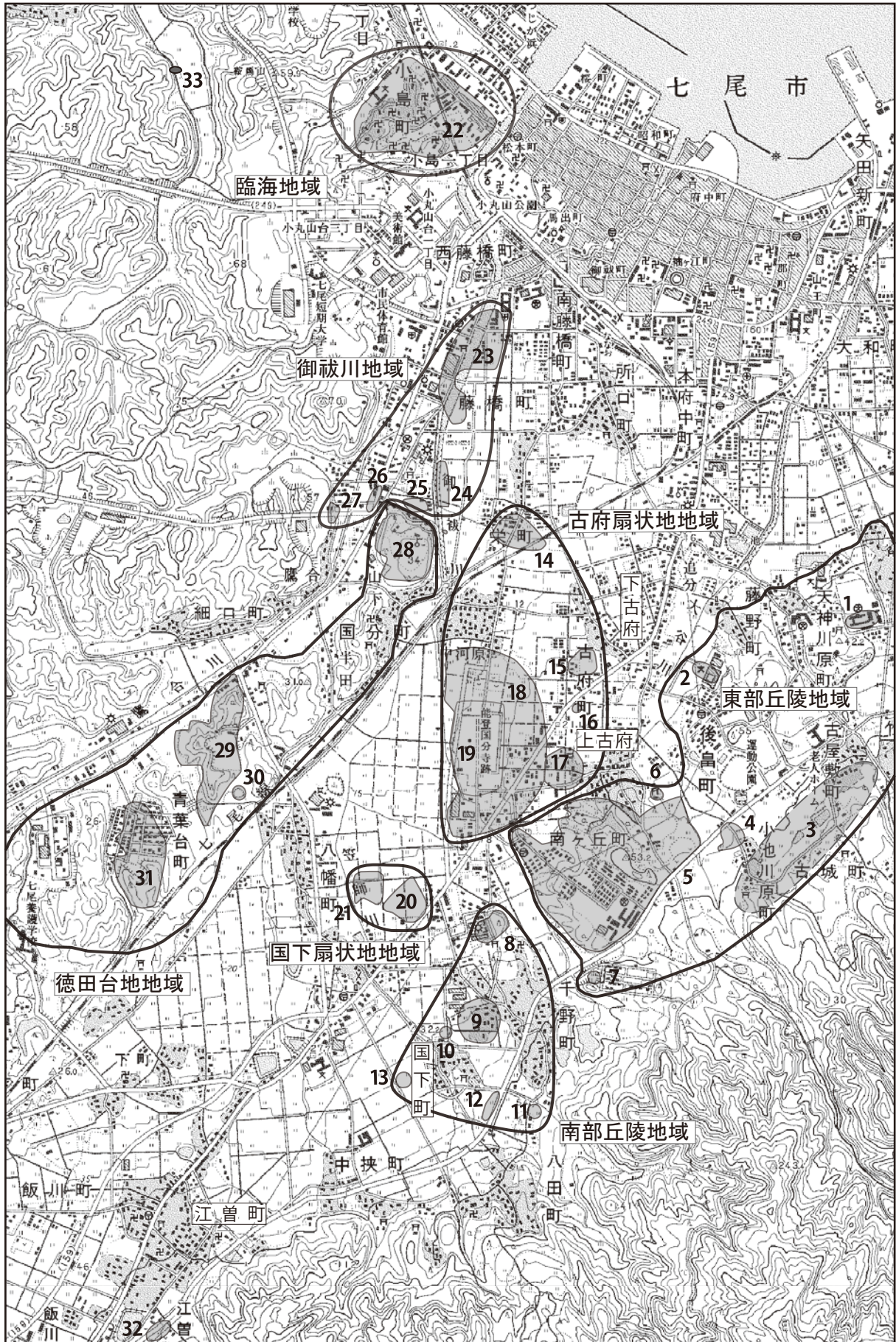
## 2. 集落遺跡の動向について

### (1) 地形について

今回の検討は、七尾市街地南側に広がる東西約2.5km×南北約3kmの地域を対象とする。古代の遺跡が盛衰した地域は、第1図のとおり、東側から順に、石動山系から連なる山地、その前縁に展開



第1図 地形と主な遺跡分布 (S=1/25,000)



国土地理院発行の2万5千分の1地形図（七尾）を合成

第2図 遺跡分布とグルーピング (S=1/25,000)

第1表 集落遺跡一覧表

グループ	番号	遺跡名	7世紀			8世紀				9世紀			10世紀			特殊な遺物の出土			備考	引用参考文献番号	
			I	II <sub>1</sub>	II <sub>2</sub>	III <sub>1</sub>	III <sub>2</sub>	IV <sub>1</sub>	IV <sub>2</sub>	V <sub>1</sub>	V <sub>2</sub>	VI <sub>1</sub>	VI <sub>2</sub>	VI <sub>3</sub>	瓦	帯金具	その他				
東部丘陵地域	1	矢田天神川原遺跡																	詳細不明。土師器・須恵器散布	-	
	2	藤野遺跡																	1989・90市調査。ほとんど削平か	19	
	3	七尾城跡													平	-	-	-	1973～2013県・市調査	23、36	
	4	小池川原地区遺跡													平・丸	巡方・鈿具	墨書	-	1989市調査 1000㎡	17	
	5	古府タブノキダ遺跡													丸	-	-	-	1982・2013県調査 各1,000㎡	11、15、22	
	6	古府総社遺跡													丸・平	-	-	-	詳細不明	11、15	
	7	千野高塚遺跡													-	-	-	-	1985市調査	14	
南部丘陵地域	8	千野遺跡																	2011・12県調査・4,400㎡。整理作業中	31、33	
	9	千野廃寺													丸・平	-	-	-	1974・2003・04市確認調査	6、11、15、34	
	10	千野大聖寺平遺跡																	詳細不明。土師器・須恵器散布	-	
	11	(千野A遺跡)																	時代不明。土師器散布	-	
	12	国下柳田遺跡													-	-	-	-	1974県・市調査 200㎡	5	
	13	国下遺跡																	詳細不明。須恵器散布	-	
古府扇状地地域	14	柴町遺跡															★	墨書・円面硯	2003～05・08県調査 9,420㎡	38	
	15	古府ヒノバンデニバン遺跡													-	-	木簡・墨書	-	2013県調査 3,900㎡。整理作業中	37	
	16	古府遺跡																	1995市調査	-	
	17	古府廃寺													丸・平	-	-	-	詳細不明	11、15	
	18	古府・国分遺跡													丸・平	○	瓦塔・齋串	-	1994以降県・市調査。一部整理中	22、32、39	
	19	能登国分寺跡・国分廃寺													丸・平	-	瓦塔・泥仏・木簡	-	1970以降市調査。法起寺式伽藍配置	11、15、16、22、32	
国下扇状地	20	千野林田遺跡														★	巡方1	円面硯	2006・07・13市調査 5,550㎡	27	
	21	八幡大皆口遺跡															丸	巡方1	瓦塔1	2004・05・07・08市調査 7,580㎡	29
御祓川地域	23	藤橋遺跡															★	-	-	1989県調査 1,800㎡	20
	24	国分遺跡																		1996～99・2004県調査 4,540㎡	28、35
	25	国分B遺跡																		2004県調査 3,850㎡	35
	26	国分高井田遺跡																		1980県調査 200㎡	7
	27	国分高井山遺跡																	齋串	1983市調査	12
徳田台地地域	28	国分尼塚遺跡																		2005県調査。須恵器散布	25
	29	細口源田山遺跡																		1977～81市調査。堅穴建物単独立地	9
	30	八幡塔地面遺跡																		詳細不明。土師器・須恵器散布	-
	31	八幡菅谷遺跡																		1979市調査	8
臨海地域	22	小島西遺跡																	木製祭祀具、墨書、獣骨	2002～04県発掘調査 6,610㎡	24
その他	32	江曾池の原遺跡																		詳細不明。土師器・須恵器散布	-
	33	赤浦大割遺跡																		1996県調査。製塩遺跡	22

★印：掘立柱建物主軸が北を指向し始める時期  
 瓦出土時期  存続期

する標高15～60mの丘陵・台地、中央の邑知地溝帯に属する幅1～1.5kmの平野、眉丈山系に連なる徳田台地や中能登丘陵が、ほぼ南西－北東方向に並行し、おおむね東側から西側に、また南側から北側に向けて標高を減ずる。また平野部は、南側から順に、笠師川が形成した小扇状地（本稿では国下扇状地と仮称）、北接して旧大谷川が形成した古府扇状地（扇径約1.5km）が展開し、標高10m以下の七尾低地を経て、現市街地が立地する臨海部の海岸平野、そして七尾南湾に至る。笠師川等の河川は、扇状地を北西方向に流下し、徳田台地に遮られて北側に流れを変え、御祓川に合流、七尾低地右岸に自然堤防及び後背湿地を形成しつつ、七尾南湾に注ぐ。

(2) 集落遺跡の動向について

集落遺跡については、主に7世紀前後～10世紀中葉に盛衰した遺跡を検討の対象とする<sup>(3)</sup>。当該地域の遺跡の分布は、第1図に主な分布・試掘調査地を示したとおり、県教委による能越自動車道（七尾水見道路）、藤橋バイパス、七尾バイパス、能登歴史公園等に伴う調査や、市教委による能登国分寺跡周辺確認調査、ほ場整備・民間開発に伴う分布・試掘調査等により、地域的な粗密は否めないが、かなりの程度進捗した状況にある。また、確認された集落遺跡のうち、記録保存措置（発掘調査）を実施した集落遺跡も少なくない。以下、立地する地形から第2図・第1表のとおり7つのグループに分け、概観する。

〔東部丘陵地域〕

標高10～60mの丘陵・台地に立地する集落遺跡で、能登臣一族の本貫地とされる矢田郷に属するものと考えられている。現在7遺跡が確認でき、うち矢田天神川原遺跡（No.1）の詳細は不明である。

藤野遺跡（No.2）は、市教委の調査で台地全体が削平を受けたため、中世末に築かれた供養塚盛土層から8世紀後半代の須恵器坏蓋片が出土したにとどまる。七尾城跡（No.3）は、能登畠山氏が拠点とした中世後半の山城・城下町遺跡である。能越自動車（七尾水見道路）関連調査等で、山裾の城下

域から7～8世紀代の須恵器・土師器が一定量出土しており、かなり広い範囲に集落遺跡が展開した可能性が高いと考えられている。市教委の確認調査では、奈良時代と考えられる国分廃寺平瓦Ⅲ類<sup>(4)</sup> 1点が出土している(第3図)。七尾城跡に西接する小池川原地区遺跡(No.4)は、8世紀代に営まれた遺跡である。市教委の調査で3×2間を主体とする掘立柱建物群が3回程度建て替えられたことが判明している。建物主軸方位はN-10°W→N-2°W→N-2°Eと変遷し、8世紀中葉以降は北を指向する。出土遺物量は多く、黒漆塗りの帯金具2点(巡方、鉸具)、轆羽口片、墨書土器「□家」「小矢」「木」、また屋根に葺く以外の目的で持ち込まれた軒丸瓦や丸瓦、平瓦(国分廃寺平瓦Ⅳ類を含む)から、官人の居宅の可能性が高いと考えられている。

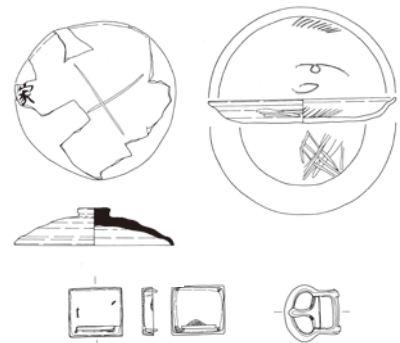
古府タブノキダ遺跡(No.5)は、一つの丘陵を占地する、東西約600m×南北約600mを測る大規模集落遺跡である。丘陵全体から奈良・平安時代の須恵器・土師器が表採されたといわれ、その南側の一角で県が調査を実施している。1982年調査では、15棟以上の掘立柱建物(SB)、柵列等を検出、少量の出土遺物を基に6世紀末頃～8世紀代における4回以上の掘立柱建物群の建て替え(1～4期)が復元されている。おおむね1・2期が7世紀代、3期が8世紀前葉、4期が8世紀中葉～後半代とされる。建物は、1期がSB5(4×3間、35㎡)・SB6(5×3間、75㎡)、2期がSB4(4×3間、49㎡)・SB13(3～×2～間)・SB14(4×2間、30㎡)・SB15(3～×2間、30㎡以上)、3期がSB



No.3 七尾城跡出土遺物 (S=1/6)  
(文献 23、36 より転載)

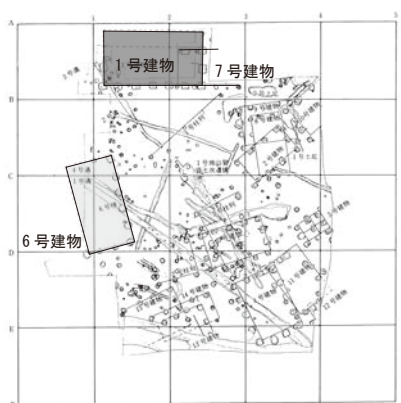


遺構配置 (S=1/1,000)



出土遺物 (S=1/6)

No.4 小池川原地区遺跡 (文献 17 より転載)



No.5 古府タブノキダ遺跡  
遺構配置図 (S=1/1,000)  
(文献 10 より転載。一部加筆。)



地形測量・トレンチ配置図 (S=1/2,000)



出土遺物 (S=1/6)

No.9 千野廃寺 (文献 34 より転載。一部加筆。)

第3図 主な遺跡の概要 1

2 (3×2間、26㎡)・SB 3 (総柱2×2間、9㎡)・SB10 (3～×3間) でそれぞれ構成される。4期は、北に主軸方位を転じたSB 7 (3～×2間、39㎡以上) から最大棟SB 1 (6×2間片面廂、97㎡) と変遷する。本建物群の性格は、従来より国府付随の関連施設あるいは郡衙等の能登郡関連施設といった位置付けがなされるが、1期SB 6を除いて、それぞれ当該期の県内の上位とされる集落遺跡でも類例をもつ建物規模を示し、少なくとも8世紀代に関しては突出した存在ではない。ここでは、4期の新しい大型建物プランの導入や建物主軸方位の転換をより評価しておきたい。2013年調査では、7世紀代の竪穴建物4棟、4×3間の掘立柱建物1棟を確認している。なお、同遺跡に含まれる南谷池からは、国府廃寺Ⅲ類の丸瓦が採集されている。古府総社遺跡 (No.6) は、古府タブノキダ遺跡に北接する。能登惣社境内で平・丸瓦片 (国府廃寺丸瓦Ⅲ類を含む) が表採されている。千野高塚遺跡 (No.7) では、市教委の調査で7世紀後半代の長頸瓶、9世紀後半代の須恵器数点が出土している。

#### 〔南部丘陵地域〕

標高30～50mの丘陵に立地する集落遺跡である。現在6遺跡が確認でき、No.10の千野大聖寺平遺跡～No.13の国下遺跡については詳細不明である。現集落域を中心に更なる遺跡数・規模の拡大が大いに予想できる地域である。

千野遺跡 (No.8) は、丘陵先端部に位置する平安時代前期を中心とした遺跡である。県の調査 (現在整理作業中) では、建物主軸方位から3回以上の建替えが想定され、明確に北に主軸をもつ掘立柱建物 (4×2間) が含まれる。千野廃寺 (No.9) は、能登国分寺跡・国分廃寺 (No.19) の南側約1.4kmに位置し、8世紀初頭頃の国分廃寺平瓦・丸瓦Ⅰ・Ⅱ類の出土で、古くから知られる。市教委が2次にわたる確認調査を実施しており (第3図)、不明確ではあるが、東西約80m、南北約90mの寺域を復元し、北西側の基壇状の高まり (版築) に比較的短期間のうちに廃絶した瓦葺きの中心施設を想定する。この8世紀初頭頃に建立された中心施設の性格については、寺院 (能登臣氏寺の大興寺前身寺を含む)、官衙 (郡家、第1次立国時の国府を含む) など諸説がある。本遺跡からは、9世紀中葉までの須恵器・土師器が出土し、瓦葺建物廃絶後も継続的に集落遺跡が営まれる。国下柳田遺跡 (No.12) は、県・市教委の小規模調査で平安時代前期の土坑・溝状遺構を確認している。

#### 〔古府扇状地地域〕

扇状地南半を主体に現在6遺跡が立地し、能登国分寺跡が立地する等、古代の中核地域の一つとなる。古府遺跡 (No.16)、古府廃寺 (No.17) を除き、発掘調査で各遺跡の様相が比較的判明している。

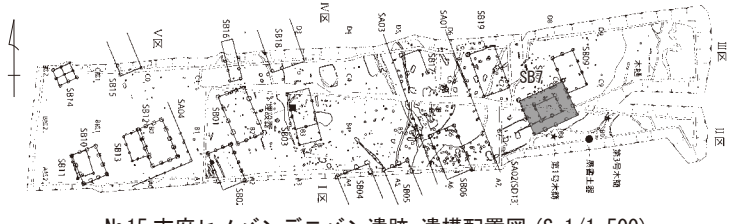
栄町遺跡 (No.14) は、扇端部の微高地 (標高6～10m) に単独立地する。県の調査で、東西約260mの範囲に古墳時代中期 (栄町1期) ～古代末 (同6期) の集落が断続的に営まれ、長期間、大規模水害を受けない安定的な土地であったことが分かる。8世紀後半～9世紀初頭頃 (栄町3期前半・後半) は、一辺42m以上の板塀に囲まれた区画内に伝統的な多梁間の構造をもつ大型建物が2回建てられ、第2次能登立国に伴う郡司クラスの在地有力者の居宅と考えられる。栄町3期前半 (第4図) でいえば、SB 4 (7×4間、84㎡)、SB 5 (5×3間、66㎡) が主・副屋となる (建物主軸方位 N-13～17° W)。9世紀後葉 (栄町4期後半) は、遺跡の性格が変わり、梁間2間の大型総柱建物 (SB 9・31、46・61㎡) を主屋とした2つの倉庫群 (主軸方位 N-5～11° W) と、真北の方位を示す幅約9mの道路 (SF 1) という、2つの方位軸が並存する。倉庫群周辺から円面硯、「水」等の墨書土器、双耳環が出土する他、道路は周辺地域における新しい土地割りの施行を示すものと評価している。古府ヒノバンデニバン遺跡 (No.15) は、県が調査し、現在整理作業中である。計画的に配された掘立柱建物18棟、板塀4列、竪穴状遺構2基、木樋1基等を検出し、8世紀中頃～後半に盛期をもつ短期間の集落である。西に20～25°振れる建物主軸方位と遺構の切り合い関係等から3期の変遷が想定され、うちSB07は四面廂

栄町 3 期前半  
(8 世紀後半)

栄町 4 期後半  
(9 世紀後半)



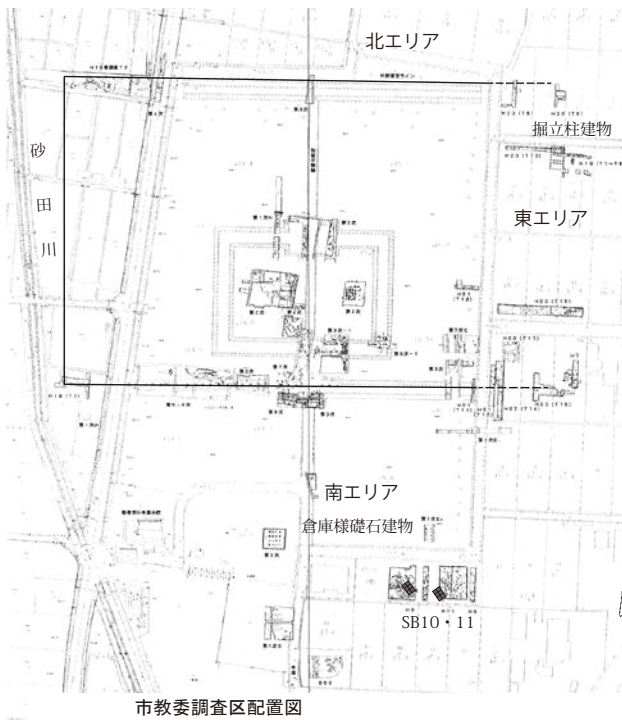
No.14 栄町遺跡 遺構配置図 (S=1/1,500) (文献 38 より転載)



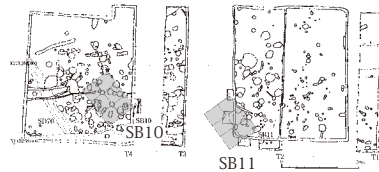
No.15 古府ヒノバンデニバン遺跡 遺構配置図 (S=1/1,500)  
(文献 37 より転載。一部加筆。)



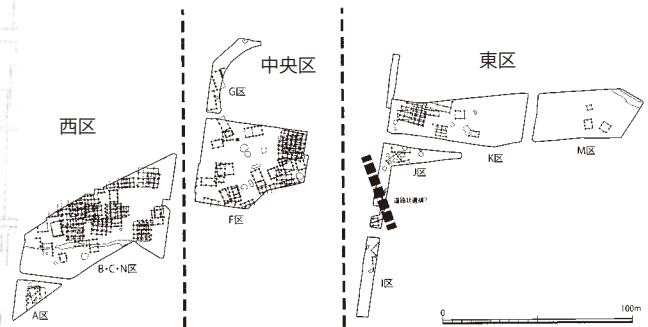
No.18 古府・国分遺跡、No.19 能登国分寺跡・国分廃寺  
位置図 (S=1/6,000) (文献 39 より転載)



市教委調査区配置図



南エリア 1994・99 市教委調査 SB10・11



北エリア 県 1・2 次調査遺構配置図 (S=1/4,000)

No.18 古府・国分遺跡、No.19 能登国分寺跡・国分廃寺 (文献 22・32・39 より転載。一部加筆。)

第 4 図 主な遺跡の概要 2

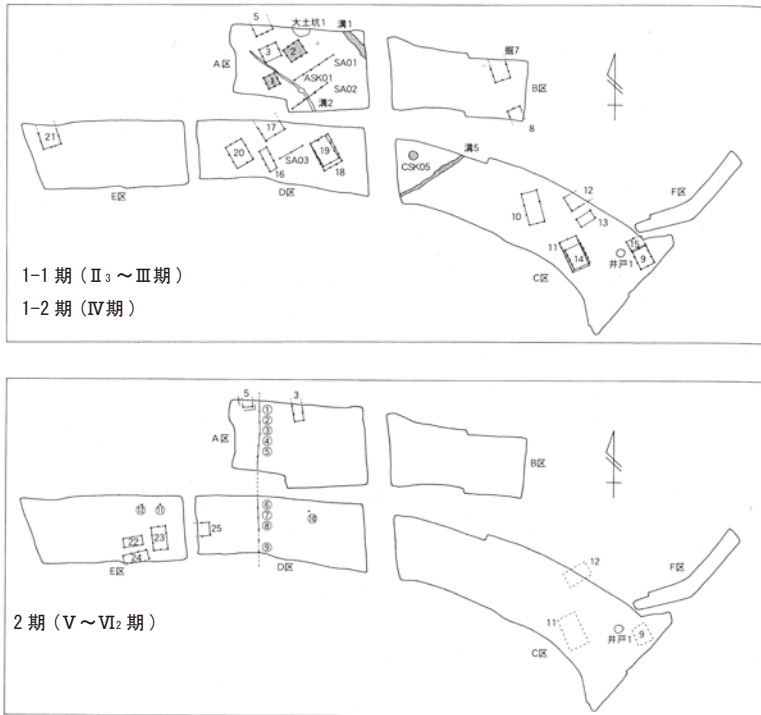
をもつ仏堂様の大型建物（廂含め71㎡）となる。「市殿」等の墨書土器、「千字文」を記した習書木簡等、出土遺物は多様である。本遺跡は、郡レベル以上の官衙関連遺跡と位置付けられ、調査区周辺に能登国が設置した「国府市」の存在が指摘されている。古府廃寺（No.17）では、ほ場整備の際に数点の丸・平瓦（国分廃寺Ⅳ類類似）が採集されている。木立雅朗氏は、瓦葺建物の存在を想定し、国分廃寺（No.19）出土のⅢ類瓦は、補修のため古府廃寺から持ち込まれた瓦と位置付ける<sup>(5)</sup>。

古府・国分遺跡（No.18）と能登国分寺跡・国分廃寺（No.19）は、扇状地北西側の砂田川右岸を占地する東西約200m×南北約400mを測る大規模・長期継続遺跡である。国史跡指定地を中心とした範囲を「能登国分寺跡」、その南北及び東側外縁に広がる遺跡範囲を「古府・国分遺跡」と区別するが、もとより一体の遺跡であり、重複部分も存在する（第4図）。まず、能登国分寺跡・国分廃寺（No.19）に変遷については、白鳳末期（8世紀初頭頃が下限か）に法起寺式の伽藍配置をもつ能登臣一族の氏寺（国分廃寺（大興寺と呼称か））が創建、奈良時代以降に定額寺に指定され、承和10年（843年）に定額寺から能登国分寺に昇格する。その後、元慶6年（882）に大規模災害で多くの堂舎が損壊、一定の改修が行われ、12世紀代まで伽藍配置を維持する。寺域南側を中心とした発掘調査からは、国分廃寺に先行する集落遺跡が7世紀中葉頃に成立すること、主要建物、伽藍配置及び寺域が数回にわたり変遷すること、定額寺あるいは国分寺昇格時に寺域全体の大規模な整地が行われたこと、9世紀中頃～10世紀前半の寺域が東西約258m（東側寺域は未確定）、南北約163mであること、9世紀代の改修では塔が再建されないこと等の重要事項が判明しつつあるものの、その具体的変遷の詳細は今後の研究を待つ部分が少なくない。

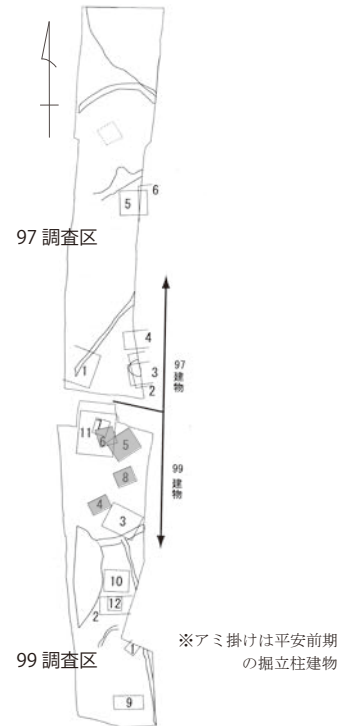
古府・国分遺跡については、寺域外側を南エリア、東エリア、北エリアに分けて述べる（第4図）。南側エリアでは、7世紀後半代の3×2間の総柱掘立建物2棟（1994・99年市教委調査SB10・11、主軸方位N-約40°W、約23㎡）と、真北より若干東に振れる総柱の倉庫様礎石建物3棟（3×3間2棟、5×2間1棟）を確認している。前者は国分廃寺創建以前、後者は国分寺並行期の「官衙的性格をもつ」倉庫群とされる。東エリアは、2007～11年の市教委調査で真北より若干東に振れる側柱の掘立柱建物3棟（4×2間、約20㎡）等を検出、7世紀中葉～8世紀前半及び9世紀後葉以降の遺物が主体をなす。遺構密度は、南・北エリアに比べて低い印象を受ける。北エリアは、七尾バイパスに係り県が調査を行い、第1・2次調査の報告書を刊行している。古代の変遷は、中央区を中心に建物群が展開する古府Ⅰ期（8世紀初頭頃～9世紀初頭頃）を4小期、建物群が西区に移動する同Ⅱ期（9世紀前半～10世紀中頃）を3小期、西・中央区に建物群が分布する同Ⅲ期（10世紀後半～11世紀代）を2小期に分けており、Ⅰ期-小期3（8世紀後半代）と、Ⅱ期に盛期が認められる。建物主軸方位は、Ⅰ期が各小期で26°W→約20°W→15°W→10°Wと西側への振れが小さくなり、さらにⅡ期で6°W→4°W→2°W、Ⅲ期で1°Wと、西側へ振れつつも北指向を次第に強める。出土遺物には陶硯・施釉陶器が多出する一方、墨書土器は限定的である。北エリアの始まりは、他エリアより若干遅れるものの、能登国分寺跡・国分廃寺（No.19）と密接に連動しており、造営・改修や運営管理に係る施設群と理解されている。

#### 〔国下・千野扇状地地域〕

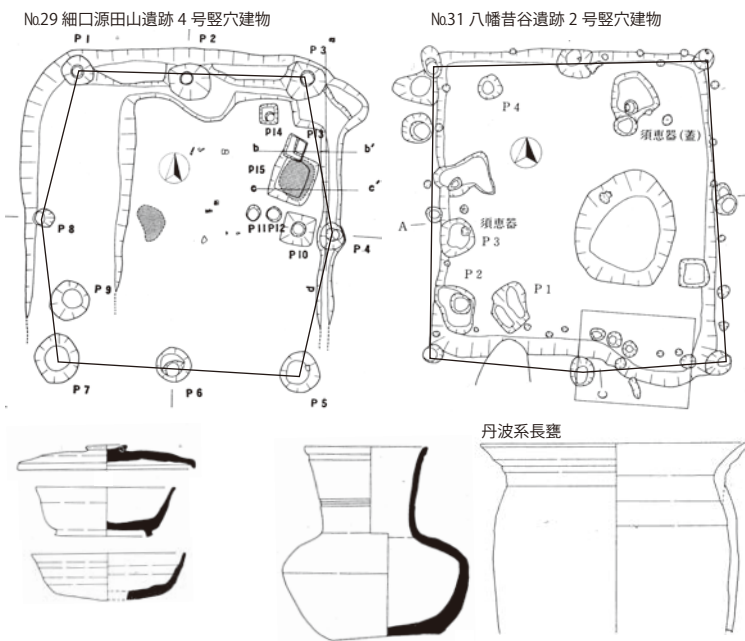
北側扇端部（標高20m前後）に千野林田遺跡（No.20）、八幡大皆口遺跡（No.21）の2遺跡が確認できる。千野林田遺跡は、市教委の調査で7世紀末～10世紀前半代の集落遺跡、10世紀中葉以降の耕地を検出している。3期の変遷をもつ集落期は、床面積約20㎡に主体をもつ掘立柱建物26棟以上、板塀、井戸等で構成される（第5図）。1-1期（8世紀前半代）は、調査区北側に3×2間のSB2（3×2間、19㎡）、SB1等が存在する。1-2期（8世紀後半代）は、溝で画された複数の敷地が展開し、盛期の一つをなす。C区南東側ではSB10（36㎡）、SB14（26㎡）、縦板組みの井戸1が、D区ではSB18（4×3間、44㎡）、SB19（3×2間、34㎡）が認められ、敷地割りの主軸方位はN-16～35°Wを示す。2013年市教



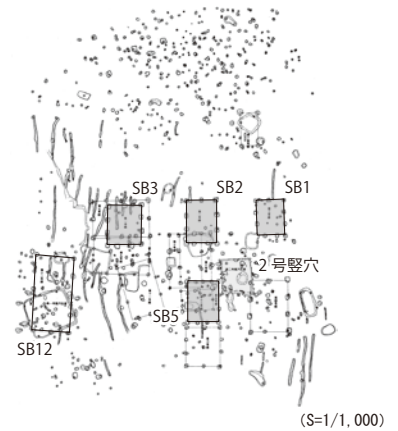
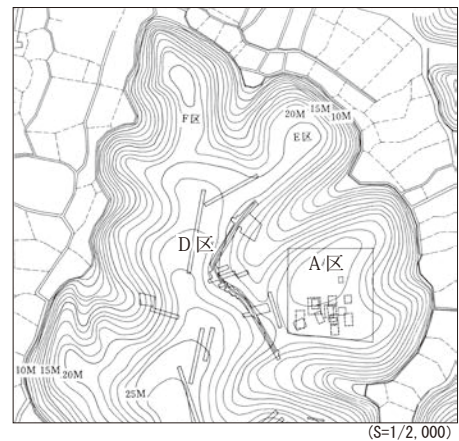
No.20 千野林田遺跡 遺構配置図 (S=1/2,000) (文献 27 から転載。一部加筆。)



No.24 国分遺跡 遺構配置図 (S=1/1,000) (文献 28 から転載。一部加筆。)



竪穴建物平面図・出土遺物 (S=1/100, 1/6) (文献 8・9 から転載。一部加筆。)



No.31 八幡昔谷遺跡 (文献 8 から転載。一部加筆。)

第 5 図 主な遺跡の概要 3

委調査で出土した丸瓦片1点(国分廢寺丸瓦Ⅲ類)も当該期に属しよう。2期(9世紀代)では、9世紀中葉に北を指向する敷地割りに再編され、E区SB23(3×2間、23㎡)等が展開する。北林雅康氏<sup>(6)</sup>は、I-2期の掘立柱建物の増加は第1・2次立国の影響を受けたもので、国衙や能登郡衙との関連性を指摘する。また2期の敷地割りの転換を、承和10年(843年)の能登国分寺昇格と連動した「能登国分寺周辺及び関連施設の再整備」との理解し、煮炊具の定量出土から官人が居宅した可能性が高いとする。八幡大皆口遺跡は、市教委の調査により9世紀中頃～11世紀代の集落域を検出している。平安前期の主な遺構は井戸1基であり、建物は調査区外に拡がると推定される。出土遺物には瓦塔片、石製巡方各1点を含み、昇格後の能登国分寺の消長と連動した集落遺跡と位置付けられている。

#### 〔御禊川地域〕

鷹合川と御禊川の合流地点を中心に形成された微高地(標高3～5m)に4遺跡が確認でき、ほぼ消長を同じくする。藤橋遺跡(No.23)・国分遺跡(No.24)は、県調査の出土遺物から7世紀前半代、9世紀後葉～10世紀前葉に盛期をもち、次いで7世紀末～8世紀初頭の短期間だけ営まれる。藤橋遺跡で検出した掘立柱建物は、伝統的な多梁の平面プランをもつ群(SB1～6、主軸方位N-50～70°W)と、9世紀後葉のSB7(2×1間、29㎡、同N-5°E)に分かれる。国分遺跡では、9世紀後葉～10世紀前葉の掘立柱建物4棟を検出している(第5図)。SB99-5(3×3間、32㎡)を最大棟に、建物主軸方位は14～28度西に振れる。国分B遺跡(No.25)では、県の調査で7世紀前半代のSD16を検出、7世紀末～8世紀代、9世紀後葉以降の遺物が出土している。国分高井B遺跡(No.26)は、低湿地の溝状遺構に7世紀前半代の須恵器坏類が混ざる。国分高井山遺跡(No.27)は、市教委の調査で丘陵部のA区から7世紀前半代と8世紀後半代の須恵器坏類、低地のB区から8世紀後半代の須恵器無台坏と斎串1本が出土している。

#### 〔徳田台地地域〕

鷹合川と御禊川に挟まれた標高20～25mの台地上に立地する4遺跡が確認でき、八幡昔谷遺跡(No.31)を除いて不明な部分が多い。国分尼塚遺跡(No.28)は、県が行った丘陵北端部の調査で須恵器甕片が出土している。細口源田山遺跡(No.29)は、市教委の調査で2×2間の壁支柱竪穴建物<sup>(7)</sup>1棟を単独で確認している(第5図)。出土遺物から8世紀後半代に位置付けられる。八幡塔地面遺跡(No.30)は詳細不明である。八幡昔谷遺跡(No.31)は、8世紀中葉～後半代と9世紀後葉に営まれる。8世紀中葉～後半代は、A地区で掘立柱建物14棟、壁支柱竪穴建物1棟(2×2間、14.4㎡)を、D区ではA区建物群を西側で画する弧状の溝1条(延長約100m・幅約1m)を確認している。南北に主軸方位をもつ掘立柱建物は、柱穴の切り合い関係から3回以上の変遷をもち、同時期と考えられるSB1～3・5は約5m離れて配される。建物は、SB12(4×2間、39㎡)を最大棟に、3×2間、床面積20～30㎡弱に主体をもつ。また9世紀後葉については、D地区の焼土痕跡と土器の一括廃棄から祭祀行為が行われる。本遺跡の建物群は、官に係わる「屋」で構成された物資収納施設と位置付けられている。

#### 〔臨海地域〕

基本的に集落遺跡は展開せず、祭祀に係る小島西遺跡(No.22)が立地する。県の調査で、斎串・人形・刀形等の木製祭祀具を主に用いた大規模な祭祀が長期にわたり執り行われたことが判明している。出土遺物から7世紀末～8世紀初頭、8世紀後半～9世紀初頭に盛期があり、後者の時期は国、郡、津等の官衙が関与する祭祀場と推定されている。出土遺物には人面墨書土器、牛・馬等の獣骨、「田長」「濱富」「大」等の墨書土器、円面硯が含まれる。

#### 〔その他〕

江曾池の原遺跡(No.32)は、能登国府につながる古代北陸道(能登支路)越蘇駅推定地域に立地し、

今後の調査が待たれる。赤浦大割遺跡 (No. 33) は、丘陵裾に立地する 8～9 世紀の製塩活動に伴う遺跡である。

以上、集落遺跡の消長について述べてきたが、次のように整理が可能である。

- 1) 7 世紀前後と 7 世紀中頃という、県内他地域と同様の集落遺跡の転換期を経て、8 世紀代に続く近接した 2 つの中心的集落域が成立をみる。前者の時期は、東部丘陵地域の古府タブノキダ遺跡 (及び七尾城跡の城下) の成立で典型的に表れる。後者の時期は、御祓川地域における他グループより濃密で優位性が感じられる 6 世紀代以降の濃密な集落経営の廃絶と、御祓川という同じ水系に属する古府扇状地地域における新たな集落形成 (古府・国分遺跡) の形をとる。従来、東部丘陵地域からの派生と考えられてきた古府扇状地地域の集落系譜は、御祓川地域と関連がより強い可能性が高い。
- 2) 第 1 次立国に先立った 8 世紀初頭を下限とする時期に、古府扇状地地域で国分廃寺、東部丘陵地域と谷を隔てた南部丘陵地域で千野廃寺が密接な関係をもって創建される。国分廃寺周辺では、古府・国分遺跡南・東エリアの活発化に加え、千野林田遺跡や御祓川地域での新たな集落形成が始まる。一方、現時点で南部丘陵地域周辺に新たな集落形成は認めがたい。なお、寺院建立を契機として、当期以降 8 世紀代を通じて、栄町遺跡、細口源田山遺跡等で痕跡を残す新たな技術者集団導入の動きが進む。
- 3) 第 1 次立国前後に古府扇状地地域で古府ヒノバンデニバン遺跡 (市・寺院関係か)、第 2 次立国前後に東部丘陵地域で小池川原地区遺跡 (官人の居宅の一部) や寺院の建立 (古府廃寺周辺)、古府扇状地地域で栄町遺跡 (郡司クラスの在地有力者居宅)、徳田台地地域で八幡昔谷遺跡 (郷クラスの倉庫群か) といった、これまで集落が形成されない場所において、これまで見られなかった律令的な各種遺跡が段階的に成立をみる。8 世紀後半代は、国分廃寺Ⅲ類瓦の共有関係から、東部丘陵・古府扇状地の 2 地域が密接に連動しており、かつ他グループよりも優位性をもって推移する。一方、現時点では、短期のうちに衰退する千野廃寺周辺や御祓川地域での集落活動は、不活発化した印象が強い。
- 4) 9 世紀初頭頃に新たな動きが認められ、特に東部丘陵地域の衰退が顕著である。古府ヒノバンデニバン遺跡・小池川原地区遺跡・八幡昔谷遺跡 (古府タブノキダ遺跡県調査区) が廃絶・不活発化し、何らかの行政機構の再編を予想させる。また、南部丘陵地域では千野遺跡の活動が始まるようだ。
- 5) 9 世紀中頃に、能登国分寺昇格と連動するように、古府扇状地・御祓川両地域の集落遺跡が活発化、この動きは 10 世紀代以降も継続する。具体的には、古府・国分遺跡の充実、栄町遺跡の倉庫群転換、八幡大皆口遺跡・藤橋遺跡・国分遺跡等の通常レベルと考えられる集落遺跡の成立があげられる。
- 6) 土地利用を反映する建物主軸方位については、第 1 表のとおりである。8 世紀後半代は、従来からの大きく西に振れる建物主軸方位が基本的に継承される中で、東部丘陵地域等の 3 遺跡において北を指向した建物群が点的に建てられる。一定規模をもつ広範な地域における地割り変更は、9 世紀後半代以降、遷移的に進み、かつ近代に認められる地割りへの継承は限定的と想定できる。なお、古府廃寺と古府・国分遺跡における 8 世紀代を通じた建物主軸方位の相違は、今後とも検討が必要である。

### 3. 能登国府所在地をめぐる研究略史と若干の所感について

古代能登国の国府については、10 世紀前半にまとめられた『和名類聚抄』に「国府在能登郡」と記されるのみで、その所在地は明らかでなく、これまでに主に 2 つの説が存在する。

まず、七尾市街地南方に位置する「古府」地名、能登臣一族の拠点である能登国分寺跡を軸に所在地を比定する「古府町説」がある。藤岡謙二郎氏は、歴史地理学の立場で古府集落付近の正南北の方形地割や土塁趾痕跡等から、古府地内の地籍を中心とし、国分集落の東辺を南北に走る道路 (通称「中道」<sup>ななみち</sup>) を西限とする方 6 町程度 (約 640 m 四方) の国府を復元する (第 1 図国府想定域 a)。そして、国府想

定域外の東南隅に能登総社が置かれ、周辺には「御禊川」「八幡」「国下」等の国府関連地名が多いとした。

2つ目の説は、2度の立国時で国府の場所が異なり（第1次立国時：国下町周辺、第2次立国時：古府町周辺）、かつ整備の度も異なるとする立場である。門脇禎二氏は、第1次立国時に能登国司の任命がなく、越前国司多治比真人広成が按察使として能登国を所管することから、「おそらく越蘇駅か、あるいはその東北に簡易につくられた国衙」で国務を行い、現存する「国下」地名はその名残りとする。そして、天平勝宝9年（757）の第2次立国後しばらくは「原初的な国府の創設」にとどまり、「いちおう」古府町周辺での本格的な国府整備については実質的な最初の専任国司上毛野牛養が任命される天平宝字5年（761）と、相前後する760年前後より後であったと推定する。濱岡賢太郎・橋本澄夫・吉岡康暢各氏も、門脇氏の移動説を基本的に支持する。濱岡・橋本両氏は、第2次立国時の国府について国史跡能登国分寺跡に東接し、能登国総社の現在地を東南隅に置き、府域を丘陵・台地とも重複させない府域を提示する（第1図国府想定域b）。また、能登郡家について、濱岡・吉岡両氏は下町周辺の台地の集落遺跡や能登国分寺に南接する建物群等を候補地とし、橋本氏は古府タブノキダ遺跡を「第2次立国の当初のころ、国衙が既設の能登郡衙と併置もしくはその庁舎の全てを一時的に利用」した可能性を指摘する。

さて、8世紀代の古府扇状地地域中央部は、集落遺跡が希薄であり、広範な地域を網羅した統一的な新しい土地割りも見出しがたい。また、国府の有力候補地とされる古府・国分遺跡は、国分廃寺と密接に連動した遺跡と位置付けられる。これらから、古代末以降の扇状地での大規模土石流による集落遺跡の消滅や、厚さ1～2mにおよぶ中世以降の土砂堆積に起因する集落遺跡把握の困難性を考慮しても、8世紀代の古府扇状地地域における方形方格をもった国府域の想定は、かなり難しいと考えざるをえない。第2次立国の母体となった越中国府が伏木台地上に展開したように、優位性を示す東部丘陵地域（および調査事例の少ない南部丘陵地域）の丘陵・台地を中心として、国庁・国衙の主要施設が分散・点在するイメージが妥当な国府像であろう。また、9世紀代以降、東部丘陵地域における集落遺跡の廃絶が顕著に認められ、古府タブノキダ遺跡内の未調査地区や古府扇状地地域、南部丘陵地域が国府中枢域の有力な移動候補地といえるが、現時点では王朝国家期の国庁・国衙の在り方とも関わり判断は難しい。

#### 4. 終わりに

以上、古代七尾地域の集落遺跡の消長を概観した。遺跡の一部しか知りえない発掘調査成果に重点を置いた地域史の復元には、大きな限界があることを十分認識しつつも、現時点での自分なりの整理を試みたつもりである。今後の研究の一助になれば幸いである。末文ではあるが、引用・参考させていただいた調査成果について十分咀嚼できなかつた部分が少なからずあると思われ、御海容をお願いしたい。

#### 註

- (1) 以下で概観する発掘調査が行われた遺跡の多くについては、調査担当者により「官衙的性格をもつ遺跡」「官衙関連遺跡」と位置付けられる場合が多い。本地域全体を俯瞰した場合、「通常の集落遺跡」が極めて少ないというパラドックスに陥り、様々な公の諸施設が想定される本地域の古代の様相を一層分かりにくくする一因にもなっている。本稿では、能登国分寺跡・国分廃寺（No.19）以外の遺跡については「集落遺跡」と呼称する。
- (2) 引用参考文献（38）による。
- (3) 年代観は、田嶋明人氏の編年（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会、同2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷」『加賀 横江荘遺跡』白山市・白山市教育委員会）に基づく。おおむね、能登国の第1次立国はⅡ<sub>3</sub>期、第2次立国はⅢ期末に比定できる。また、承和10年（843）の国分寺昇格はⅤ<sub>2</sub>期に比定できる（第1表参照）。
- (4) 引用・参考文献（11）の木立雅朗氏分類による。本稿の瓦の年代観は、国分廃寺Ⅰ・Ⅱ類を8世紀初頭頃、Ⅲ類を奈良時代、Ⅳ類を小池川原地区遺跡出土事例から奈良時代（田嶋氏編年Ⅲ～Ⅳ期）と位置付けている。
- (5) 引用・参考文献（11）による。

- (6) 引用・参考文献 (27) による。
- (7) 細口源田山遺跡 4 号堅穴建物、八幡昔谷遺跡 2 号堅穴建物は、野々市市末松遺跡群等で検出した壁支柱堅穴建物に類する建物と考えられる。また、八幡昔谷 2 号堅穴建物出土遺物に、口縁部が外反しながら長くのびる丹波系長甕が含まれる。これらの特徴は、手工業生産技術を有した工人集団の移動を示すものとされる（望月精司 2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落－移民系煮炊具と堅穴建物構造、集落経営の視点から－」『日本考古学 第 23 号』日本考古学協会）。栄町遺跡でも飛鳥時代末頃の別タイプの壁支柱堅穴建物 2 棟（SI 5・6）が確認でき、国分廃寺建立を頂点として、7 世紀末頃～8 世紀代に同地域へ様々な技術導入が図られた状況がうかがえる。また、八幡昔谷遺跡について、移民系の堅穴建物、谷部と取り込む弧状の溝に加え、建物群北側の不規則な柱穴群をなんらかの生産作業の痕跡と評価すれば、公（郷クラスか）に関わる倉庫群以外の位置付けも検討する必要がある。

## 引用・参考文献

- (1) 藤岡謙二郎 1969『国府』日本歴史叢書 25（株）吉川弘文館
  - (2) 橋本澄夫・濱岡賢太郎他 1970『七尾市史 資料編第四巻』七尾市役所
  - (3) 濱岡賢太郎 1974「第一編第三章 古代の七尾」『七尾市史』七尾市役所
  - (4) 門脇禎二 1974「第二編 古代」『七尾市史』七尾市役所
  - (5) 平田天秋 1975「千野・国分遺跡」『日本考古学年報 26（1973 年版）』日本考古学協会
  - (6) 橋本澄夫ほか 1975『千野廃寺跡調査報告』七尾市教育委員会
  - (7) 中島俊一 1981『国分高井遺跡発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財センター
  - (8) 桜井憲弘・濱岡賢太郎 1981『八幡昔谷遺跡』七尾市教育委員会
  - (9) 桜井憲弘・濱岡賢太郎ほか 1982『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会
  - (10) 垣田修児・宮下栄仁・橋本澄夫 1983『七尾市古府タブノキダ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
  - (11) 木立雅朗 1984「七尾市古府町周辺における古瓦の供給－国分廃寺（「能登国分寺跡」）を中心とした供給体制－」『石川考古学研究会々誌 第 27 号』石川考古学研究会
  - (12) 土肥富士夫他 1984『国分高井山遺跡』七尾市教育委員会
  - (13) 門脇禎二 1986『日本海域の古代史』（財）東京大学出版会
  - (14) 土肥富士夫 1986『千野高塚古墳』七尾市教育委員会
  - (15) 木立雅朗 1987「資料編・石川」『北陸の古代寺院－その源流と古瓦－』桂書房
  - (16) 善端 直・木立雅朗ほか 1989『史跡能登国分寺跡－第五・六・七次発掘調査報告書－』七尾市教育委員会
  - (17) 岡田雅人ほか 1990『七尾市小池川原地区遺跡』七尾市教育委員会
  - (18) 吉岡康暢 1991（1975 初稿）「第九 能登」『新修 国分寺の研究』第 3 巻 東山道と北陸道（株）吉川弘文館
  - (19) 善端 直ほか 1991『藤野遺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会
  - (20) 木立雅朗 1992『藤橋遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
  - (21) 善端 直 2000『能登国分寺跡発掘調査報告書－個人住宅建設に伴う緊急調査の報告書－』七尾市教育委員会
  - (22) 七尾市史編さん専門委員会 2002『新修 七尾市史 1 考古編』七尾市役所
  - (23) 善端 直ほか 2002『七尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ－七尾城下範囲確認および開発に伴う事前調査名等の発掘調査報告書』七尾市教育委員会
  - (24) 安英樹 2004「調査報告 赤浦大割遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第 12 号』（財）石川県埋蔵文化財センター
  - (25) 澤辺利明 2007『七尾市 国分尼塚遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
  - (26) 大西 顕ほか 2008『七尾市 小島西遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
  - (27) 北林雅康ほか 2009『千野林田遺跡発掘調査報告書』、同 2015『千野林田遺跡（G 地区）発掘調査報告書』七尾市教育委員会
  - (28) 松山和彦ほか 2010『七尾市 国分遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
  - (29) 北林雅康ほか 2010『八幡大皆口遺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会
  - (30) 七尾市史編さん専門委員会 2011『新修 七尾市史 14 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』七尾市役所
  - (31)（財）石川県埋蔵文化財センター 2012『石川県埋蔵文化財情報 第 28 号』
  - (32) 北林雅康七尾市教育委員会 2012『史跡 能登国分寺跡発掘調査報告書－平成 19 年度～23 年度の範囲確認調査報告－』七尾市教育委員会
  - (33)（公財）石川県埋蔵文化財センター 2013『石川県埋蔵文化財情報 第 30 号』
  - (34) 泉 妙宗・北林雅康ほか 2013『七尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ－平成 14～24 年度事前調査等の発掘調査報告－』七尾市教育委員会
  - (35) 布尾和史ほか 2014『七尾市 国分遺跡 国分 B 遺跡』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
  - (36) 干場 勉 2014『七尾城跡（P 11・旧市道区）』七尾市教育委員会
  - (37)（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014『石川県埋蔵文化財情報 第 32 号』
  - (38) 川畑 誠ほか 2015『七尾市 栄町遺跡』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
  - (39) 久田正弘・和田龍介 2015『七尾市古府・国分遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
- ※能登国分寺跡関連発掘調査報告書は、紙面の都合により文献 (22) で代表させ、一部を除き割愛したい。

---

---

石川県埋蔵文化財情報

第 34 号

発行日 2015（平成27）年10月20日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address [mail@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:mail@ishikawa-maibun.or.jp)

---

---

印 刷 鷺川印刷株式会社

---

---

©（公財）石川県埋蔵文化財センター

